福井県埋蔵文化財調査報告　第189集

大 蔵 北 遺 跡

― 北陸新幹線建設事業に伴う調査 14 ―

２０２４

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序　　文

このたび、北陸新幹線建設工事に伴って、敦賀市大蔵地係において、平成29･30年度に発掘調査を実施しました大蔵北遺跡の発掘調査成果がまとまりましたので、報告書を刊行する運びとなりました。

大蔵北遺跡は、敦賀平野を形成するひとつである木ノ芽川扇状地の丘陵上に立地し、中世から近世に営まれた遺跡です。今回の発掘調査では、室町時代後葉から約 100 年に亘って造立されていた中近世墓であることが判明しました。

敦賀を含む若狭地方では、中近世墓の調査例は少ないうえ、紀年銘が刻まれた石造物も少数でしたが、大蔵北遺跡では一定数の量が確認されました。

今回の調査成果が、この地域の歴史を調べ、中近世墓研究を進める上での基礎資料として活用され、埋蔵文化財に対する理解がより一層深まることを期待します。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ、多くの皆様から多大な御支援と御配慮を頂きましたこと、深く感謝申し上げます。

令和６年３月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所　長　　中　川　佳　三

例　　言

1　本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが北陸新幹線建設工事に伴い、平成29・30年度に実施した大蔵北遺跡（福井県敦賀市大蔵所在）の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、独立行政法人　鉄道建設・運輸施設整備支援機構の依頼を受けて、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、平成29年度は田中勝之・鈴間智子が、平成30年度は水村信行・鈴間智子が担当した。

3　発掘調査は、平成29年８月１日から11月30日までと平成30年８月１日から12月28日まで実施した。出土遺物の整理は、平成31年度から令和５年度まで福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。

4　平成29・30年度の発掘調査の支援業務は、橋本技術株式会社に委託した。

5　本書の編集・執筆は青木隆佳が行った。

6　遺構・遺物の図版作成、写真図版作成は青木が、遺構の写真撮影は田中・鈴間が行なった。

7　石造物の実測・デジタルトレース・写真撮影は、平成31年度は北陸航測株式会社、令和２年度は株式会社平和ITCに委託した。

8　本書における水平レベルの表示は海抜高（m）を示し、方位は真北と座標北の両者を併用した。

9　土色の色調については、『新版標準土色帳（2003年度版）』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色標監修）を準拠にした。

10　大蔵北遺跡に関するこれまでの成果の発表のうち、本書と齟齬がある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。

11　調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。なお、石造物については、全て大蔵寺に返還した。

12　発掘調査ならびに本書の作成にあたり、下記の機関・団体から指導・協力を得た。

大蔵寺　敦賀市教育委員会文化振興課　福井県未来創造部新幹線建設推進課

13　遺物整理は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理・普及グループ職員および会計年度任用職員があたった。

目　　次

第１章　調査の経緯と経過 …… 1
第１節　調査の経緯 …… 1
第２節　調査の経過 …… 2

第２章　大蔵北遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境 …… 5
第１節　地理的環境 …… 5
第２節　歴史的環境 …… 6

第３章　遺跡の概要 …… 9
第１節　基本層序 …… 9
第２節　遺構分布 …… 9
第３節　遺物出土状況 …… 9

第４章　遺構と遺物 …… 13
第１節　遺構 …… 13
第２節　遺物 …… 25

第５章　まとめ …… 38

図　版　目　次

図版第１　遺跡
（１）　遺跡遠景
（２）　遺跡遠景
図版第２　遺構
（１）　１号遺構（東より）
（２）　２号遺構（西より）
（３）　４号・６号遺構（北東より）
（４）　７号遺構（北より）
（５）　８号遺構（南東より）
（６）　９号遺構（北より）
（７）　10号遺構（北東より）
（８）　11号遺構（北東より）
図版第３　遺構
（１）　12号遺構（北東より）
（２）　13号遺構（北東より）
（３）　14号遺構（南東より）
（４）　15号遺構（北東より）
（５）　16号遺構（南東より）
（６）　17号遺構（北より）
（７）　18号遺構（北より）
（８）　19号遺構（東より）
図版第４　遺構
（１）　19号遺構（南西より）
（２）　22号遺構（西より）
（３）　23号遺構（北東より）
（４）　25号遺構（北東より）
（５）　26号遺構（南東より）
（６）　27号遺構（北東より）
（７）　28号－１・２遺構（南東より）
（８）　28号－３・４遺構（南東より）

図版第５　遺構
（１）　29号遺構（南西より）
（２）　36号遺構（西より）
（３）　37号遺構（西より）
（４）　38号遺構（北より）
（５）　１～４号土坑（南東より）
（６）　１～４号火葬土坑（北より）
（７）　石段（西より）
（８）　39号遺構（東より）
図版第６　遺物
図版第７　遺物
図版第８　遺物
図版第９　遺物
図版第10　遺物
図版第11　遺物
図版第12　遺物

挿　図　目　次

第１図　大蔵北遺跡の位置図　……１
第２図　現況測量図　……３・４
第３図　敦賀平野の地形分類図　……５
第４図　周辺の遺跡　……７
第５図　基本層序　……10
第６図　遺構配置図　……11・12
第７図　遺構実測図１　……14
第８図　遺構実測図２　……15
第９図　遺構実測図３　……16
第10図　遺構実測図４　……17
第11図　遺構実測図５　……18
第12図　遺構実測図６　……19
第13図　遺構実測図７　……20
第14図　遺構実測図８　……21
第15図　遺構実測図９　……23
第16図　遺構実測図10　……24
第17図　遺物実測図１　……26
第18図　遺物実測図２　……27
第19図　遺物実測図３　……28
第20図　遺物実測図４　……29
第21図　遺物実測図５　……30
第22図　遺物実測図６　……31
第23図　遺物実測図７　……32
第24図　遺物実測図８　……33
第25図　石造物計測部位模式図　……34

表　目　次

第１表　一石五輪塔観察表　……35
第２表　五輪塔空風輪観察表　……35
第３表　五輪塔火輪観察表　……35
第４表　五輪塔水輪観察表　……36
第５表　五輪塔地輪観察表　……36
第６表　宝篋印塔観察表　……36
第７表　板碑観察表　……36
第８表　石仏観察表　……37
第９表　仏像観察表　……37
第10表　地蔵観察表　……37
第11表　記年銘のある石造物の年代　……38

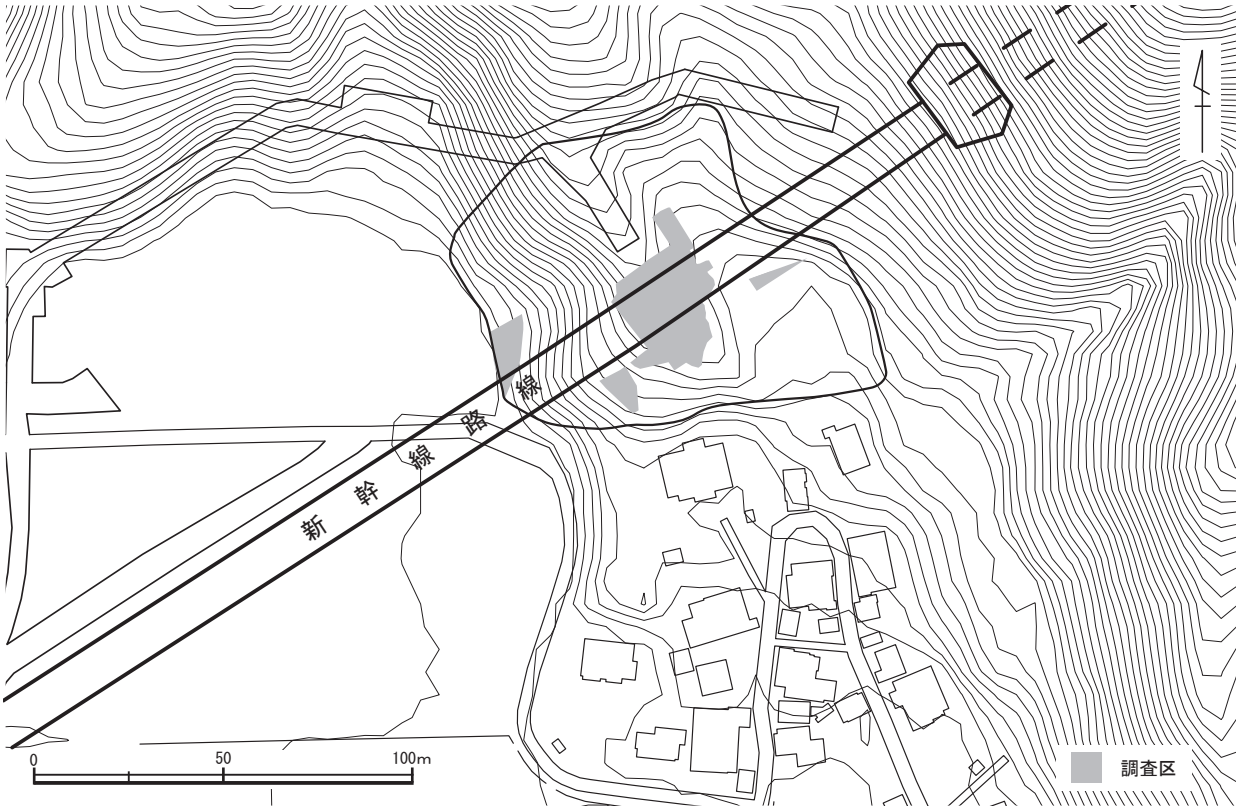
第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯（第１図）

大蔵北遺跡は敦賀市大蔵の北西側、南に延びる尾根頂部から斜面および谷部に所在し、調査前の現況は山林、墓地である。大蔵北遺跡は、周知の埋蔵文化財包蔵地であり、中・近世の遺物散布地（福井県遺跡地図番号06137）として福井県遺跡地図に登録されている。

北陸新幹線は、東京から北陸地方を経て大阪に至る路線として国の整備計画が決定され、平成27年に長野・金沢間が営業を開始し、残る金沢・大阪間のうち福井駅部は平成17年、金沢・敦賀間については平成24年に工事実施計画が認可され、同年８月に着工された。これに伴い福井県教育庁生涯学習・文化財課（以下、文化財課）が工事の影響を受ける埋蔵文化財の取り扱いについて、事業主体である独立行政法人鉄道運輸施設整備機構（以下、鉄道機構）と福井県地域戦略部新幹線建設推進課の間で協議を行った。結果、埋蔵文化財包蔵地内において建設工事により直接的な影響を及ぼす箇所と、恒久的な工作物の設置箇所について内容把握のための１次調査（試掘調査）を実施し、必要に応じて記録保存のため２次調査（発掘調査）や工事立会を実施することで合意した。調査は鉄道機構が文化財課に依頼し、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（以下、県埋文）が発掘調査等を実施することとなった。

大蔵北遺跡の１次調査は平成28年８月29日～９月６日・平成29年１月11日および平成29年７月19・20日の３回実施した。調査はトレンチを13箇所設定し、実施した。その結果、明確な遺構は検出されなかったが、尾根頂部や東および南側斜面等に中近世の墓地群が良好に遺存していたため尾根頂部を中心とした平坦面と東側の谷部、西側斜面の平坦部の計810㎡が２次調査の対象となった。２次調査は平成29年８月～11月と平成30年８月～12月に実施した。



第１図　大蔵北遺跡の位置図（縮尺１／2,000）

第２節　調査の経過（第２図）

Ⅰ　現地調査

平成29年度

８月から開始した。まずは、調査前の現況を記録するために、草刈りや伐採した木の枝の清掃を行った。お盆明けから表土はぎを人力で開始し、その後順次遺構の調査を実施していった。11月21日に空中測量を実施し、29日に遺物を埋文へ搬出し、30日に発掘調査を終了した。

平成30年度

８月から開始予定であったが、諸事情により着手できたのが９月からである。前年同様に現況を記録する。調査区１は９月５日着手、10月10日に写真測量、調査区２は９月18日に着手、10月24日に写真測量を実施、調査区３は10月10日に着手、12月５日上層写真測量、11日下層写真測量、調査区４は11月15日着手、12月10日写真測量。その後補足調査をし、12月18日、遺物を埋文へ搬出、28日に発掘調査を終了。

平成29年度

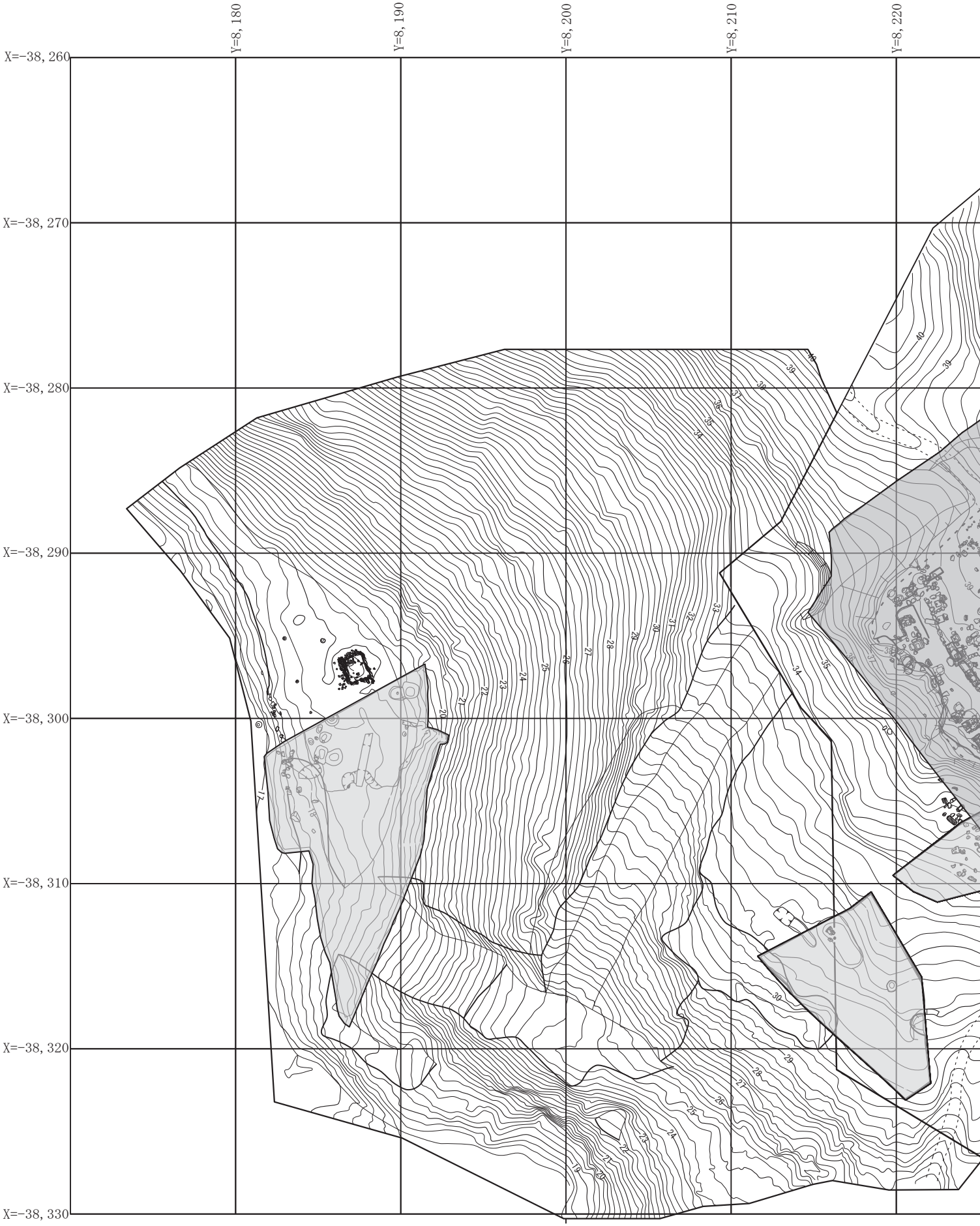
８月１日　現地打ち合わせ
　９日　基準点測量
　10日　現況測量
　22日　現場事務所等設営
　23日　作業開始
　28日　グリッド測量
　31日　トレンチ設定掘削
９月５日　表土掘削
　13日　遺構検出
　29日　遺構掘削
10月26日　自然石・列石撤去
11月７日　墓石撮影
　13日　墓石移動
　21日　ラジコンヘリによる空中測量
　29日　遺物等を埋文へ搬出
　30日　現場終了

平成30年

８月１日　現地打ち合わせ
　８日　基準点測量
　10日　グリッド測量
　29日　事務所等設営
９月５日　作業開始
　６日　現況測量
　11日　現況写真撮影（調査区１）
　12日　表土掘削（調査区１）
　18日　表土掘削（調査区２）
　25日　谷埋土掘削（調査区２）
　28日　トレンチ掘削、集石写真測量（調査区１）
10月10日　写真測量（調査区１）
　15日　３次元測量（調査区１）
　23日　現況写真（調査区３）
　24日　３次元測量（調査区２）
　25日　現況測量（調査区３）
　29日　表土掘削　トレンチ掘削（調査区３）
11月８～12日　伐採作業（調査区４）
　14日　現況写真撮影（調査区４）
　15日　表土掘削（調査区４）
　27日　石検出作業（調査区３）
　　遺構精査（調査区４）
　28日　石積面出し（調査区３）
　30日　遺構掘削（調査区４）
12月５日　写真測量（調査区３）
　７日　下層遺構掘削（調査区３）
　11日　写真測量（調査区３）
　18日　遺物を埋文へ搬出
　25日　事務所等撤収
　28日　現場終了

Ⅱ　遺物整理

石造物を中心にテンバコ80箱出土した。令和元年度は、洗浄・注記・接合・復元、令和２年度は復元、令和３年度はトレース、令和元・２年度に石造物の実測とトレースを外部委託した。石造物については、令和４年度中に大蔵寺へ返還した。令和５年度は原稿執筆し、報告書を刊行し大蔵北遺跡の発掘作業を完了した。



第２図　現況測量図（縮尺１／300）

Y=8, 230
Y=8, 240
Y=8, 250
Y=8, 260
Y=8, 270
Y=8, 280
磁北
真北
方眼北
0
10
20m
1:300

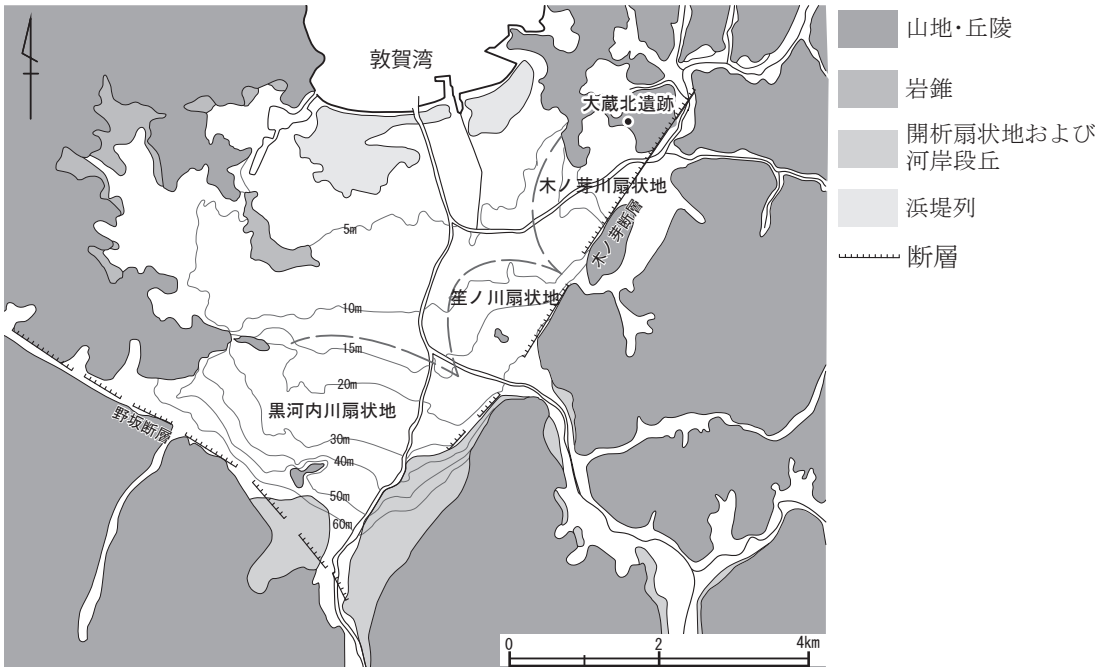
第２章　大蔵北遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境（第３図）

大蔵北遺跡は、福井県敦賀市大蔵に位置する。敦賀市は、福井県のほぼ中央に位置し、周囲を木ノ芽・越美・野坂の各山地と敦賀湾に囲まれた、東西南北各約５㎞の扇状を呈する敦賀平野を中心としている。以下敦賀平野の地形について概略的に記述する。

琵琶湖北岸の野坂山地内には、本州大破砕帯の一部を形成する断層・地溝が多数存在し、その一部は野坂断層・木ノ芽断層として敦賀平野南東および西の縁辺に顕著な階段状の断層崖をみせている。平野の形成はこれら断層線に沿った地盤の沈降作用によると考えられる。

敦賀平野に流入する主要な河川は、黒河川・笙ノ川・木の芽川の３河川である。黒河川と笙ノ川は、敦賀市南端の野坂山地内を源とし、笙ノ川敦賀市南東から北流しながら平野内を流れ敦賀湾に注いでいる。黒河川は敦賀市の南から北流し敦賀平野南端で笙ノ川に合流する。木ノ芽川は、木ノ芽山地内を源とし、西流しながら敦賀市内中心部で笙ノ川に合流する。これら３河川は平野流入に伴い、黒河川扇状地・笙ノ川扇状地・木ノ芽川扇状地と呼称される扇状地を平野南部から東部に連続的に形成しており、この一帯は複合扇状地となっている。一方の海側の平野北端部には「気比の松原」として著名な浜堤が形成されている。この浜堤は形成時期を異にする３列の浜堤列からなり、その形成は弥生時代中期以前と考えられている。扇状地と浜堤に挟まれた平野中央部は地表の勾配が緩慢な地域であり、潟湖上を河川堆積物が埋積した三角州低地となっている。このほか、平野東部・西部の出入りの激しい山脚周辺の山麓には、背後の山地の沈降により生じた湿地帯が、また、平野北西部の山麓には、風化岩屑により形成された岩錐が、それぞれ特徴的な地形として認められる。このように敦賀平野の地形は大きく分けて、北端海岸線の浜堤・平野中央部の三角州低湿地・平野南および東側山際の扇状地の３つから成り立っている。大蔵北遺跡は、木ノ芽川扇状地の北側に張り出す丘陵上に立地する。



第３図　敦賀平野の地形分類図（縮尺１／100,000）

第２節　歴史的環境（第４図）

大蔵北遺跡周辺の遺跡を時代別に概観する。

旧石器時代は、敦賀市南西部に位置する野坂山頂でナイフ形石器が発見されているのみである。縄文時代も土器が出土しているが、遺構は確認されていない。浜堤西側にある丘陵斜面で縄文時代中期の土器がある程度まとまって出土している。

弥生時代では、舞崎遺跡（第４図７、以下番号のみ）、中遺跡（13）、吉河遺跡（17）がある。

舞崎遺跡は丘陵上に位置し、平成11・12年に市教委が発掘調査を実施している。調査では、弥生時代中期～後期の住居跡５棟、土抗２基などを検出し、同時代に存在していた高地性集落と考えられる。

中遺跡は木ノ芽川扇状地上に位置し、昭和51・52年に北陸自動車道・敦賀バイパス建設に先立ち県教委が発掘調査を実施している。その結果、遺構は溝など少数の検出であったが、後期の弥生土器などが多量に出土した。

吉河遺跡は笙ノ川扇状地上に位置し、昭和56～60年に県埋文が国道８号敦賀バイパスに先立ち発掘調査を実施している。その結果、中期から後期にかけての竪穴住居６棟、方形周溝墓25基のほか、当時の集落内道路などムラの過半が検出され、土器・石器など多量の遺物が出土した。その他の弥生時代の遺跡は、大蔵遺跡（８）や松原遺跡（２）があり、弥生時代中期の土器が採取されている。

弥生時代～古墳時代の集落は大町田遺跡（16）があり、同遺跡は笙ノ川扇状地上に位置し、平成20年と同29年に発掘調査が実施されている。前者は公民館建設に伴い市教委が発掘を実施し、弥生時代後期末から古墳時代初頭の住居跡８棟など検出、同時期の土器が多量に出土した。後者は北陸新幹線建設に伴い県埋文が実施し、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡23棟・掘立柱建物９棟や土抗墓１基などを検出し、同時期の土器や勾玉・管玉などの遺物が出土した。

古墳時代では、中遺跡（13）と吉河遺跡（17）がある。中遺跡は昭和60年の市教委の発掘調査で中・後期の土師器・須恵器が、吉河遺跡では前期の土師器と後期の須恵器が出土しているがともに遺構の検出はみられなかった。

古墳はほぼすべての丘陵上に数多く立地する。

舞崎遺跡（７）では円墳１基と方墳４基が確認された。円墳には葺石が備わっている

明神山古墳群（19）は坂ノ下の背後の尾根上にあり、19基で構成されている。１号墳は葺石を備えた２段築成で、全長19m、高さ5.5mを測る前方後方墳であり、敦賀で最も古い首長墓と想定されている。９号墳は横穴式石室をもった全長20m、高さ３mを測る小型の前方後円墳である。これらは古墳時代前期～後期にわたって造営された。

向出山古墳群（24）は通称向出山と呼ばれる独立丘陵に立地する。これまでに古墳時代中期～後期の４基が確認されている。１号墳は標高約70mの丘陵上に立地する、葺石を備えた２段築成で径60m、高さ９mの円墳であり、平野に面する西側に、東西12m、南北18mの方形造り出し部を有している。墳頂にある２基の竪穴式石室から金銅装眉庇付冑をはじめ多種多彩な副葬品が出土しており、５世紀末の首長墓に位置づけられている。３号墳は向出山東南の山麓に築かれた南西に開口する横穴式石室をもつ、径14m、高さ3.7mの円墳である。石室は片袖式で、全長７m、玄室高2.6mを測り、６世紀後葉の築造である。

立洞古墳群（11）は井川区東側の山稜尾根先端部にが分布する。４基からなる群のうち２号墳は２段築成で葺石を備える全長24m、高さ4.6mの帆立貝形古墳で、４世紀末～５世紀初頭の地域首長墓と見

第４図　周辺の遺跡（縮尺１／25,000）

1　大蔵北遺跡　2　松原遺跡　3　敦賀町奉行所跡　4　気比神宮境内遺跡　5　金ケ崎天筒山城跡　6　舞崎古墳
7　舞崎遺跡　8　大蔵遺跡　9　大椋神社経塚　10　大椋古墳群　11　立洞古墳群　12　深山寺経塚　13　中遺跡
14　中村山古墳群　15　山ノ上古墳群　16　大町田遺跡　17　吉河遺跡　18　坂ノ下遺跡　19　明神山古墳群
20　坂ノ下中世墓群　21　小谷ヶ洞古墳群　22　吉河古墳群　23　中郷古墳　24　向出山古墳群

られている。

また、明神山、向出山両古墳群のあいだに布留式土器を出土した前期古墳を含む小谷ケ洞古墳群(24)、さらに向出山、立洞両古墳群のあいだに山の上古墳群(15)などが分布している。

古代では、遺跡数は少なく気比神宮境内（４）で礎石や古瓦が採取されている。

平安時代末から中世の経塚として舞崎遺跡（７）・大椋神社経塚・（９）深山寺経塚(12)がある。

舞崎遺跡では経塚２基を検出し、造営時期が平安時代末と考えられる。

深山寺経塚群は、深山寺集落に西接する丘陵上に位置し、約20基の経塚からなる。明治時代に和鏡と湖州鏡各１面と刀子片が出土している。その後昭和57年に宅地造成に先立ち市教委が７基の経塚を発掘調査した。その結果、経塚群は平安時代末期から室町時代まで造営されていると考えられる。

大椋神社経塚は1999年に大椋神社境内の切り土断面に甕が露出しているのを発見され、市教委が緊急調査を実施している。その結果、２基の経塚が確認され、銅製経筒が残存していた。造営時期は外容器から鎌倉末期から南北朝にかけてと推測された。

中世では、金ヶ崎天筒山城跡（５）がある。この山城は戦国時代の記述によると天筒山の周囲がほとんど湿地帯であった。

坂ノ下中世墓群は明神山古墳群丑寅山支群が並ぶ尾根上にある。造営時期は室町時代から戦国時代と考えられている。

敦賀町奉行所跡（３）の下層で15世紀後半と16世紀後半の遺構面を確認している。16世紀後半の遺構面では礎石が確認され複数の建物跡が復元されている。

近世では、敦賀町奉行所跡がある。江戸時代に小浜藩の北・南奉行所、北・南代官所、御茶屋等が置かれていた区域で、その以前には敦賀城が存在していたという記録がある。

引用・参考文献

敦賀市教育委員会　　2001 『舞崎前山古墳　舞崎遺跡』

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2008 『坂ノ下遺跡群』 一般国道８号敦賀バイパス関係遺跡調査報告書第1集

敦賀市教育委員会　　2012 『敦賀町奉行所跡』

敦賀市教育委員会　　2013 『深山経塚群』

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2009 『第24回　福井県発掘調査報告会資料　－平成20年度に発掘調査された遺跡の報告－』

第３章　遺跡の概要

第１節　基本層序（第５図）

大蔵北遺跡は木ノ芽川扇状地の扇頂部北側に位置する丘陵の南西に派生する尾根東側に位置する。調査区一帯は調査に入る直前まで墓地および杉林で全体を表土が覆い、石造物等が散在していた。

基本層状は表土を取り除くと地山が見られ、尾根斜面の平坦部で約30㎝の盛土の堆積が見られる箇所もある。谷部では表土下に１ｍ以上の砂礫土が堆積している。尾根西側の裾部平坦面では表土・盛土・斜面崩落土の順で堆積し、盛土は約１ｍありその下層の崩落土は１ｍ以上である。この箇所で表土直下と盛土下の２面で遺構面を検出したが、それ以外は遺構面１面であった。

第２節　遺構分布（第６図）

尾根頂部平坦部に近世墓地が造営されており、その周囲に石造物を伴う配石・集石群が見られる。また、その尾根の南・東・西斜面を削り出した平坦部にも石造物を伴う集石群が見られる。この尾根の西へ離れた平坦部では火葬施設に関連する遺構を検出した。

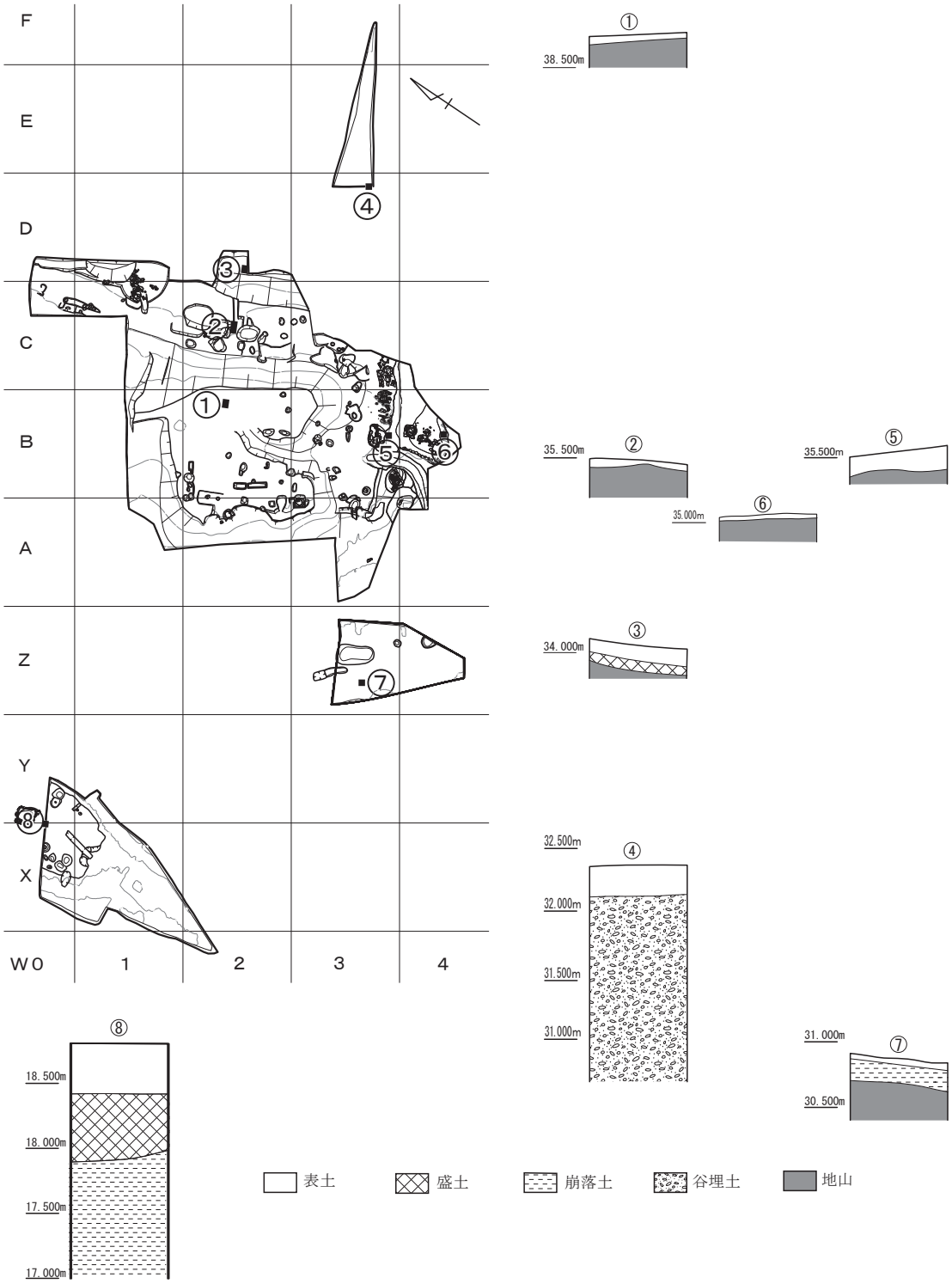
今回の調査で集石を伴う遺構を下記のように分類を行った。

まず、人骨の有無、木棺などの埋葬施設の痕跡の有無により墓の可否を判断した。

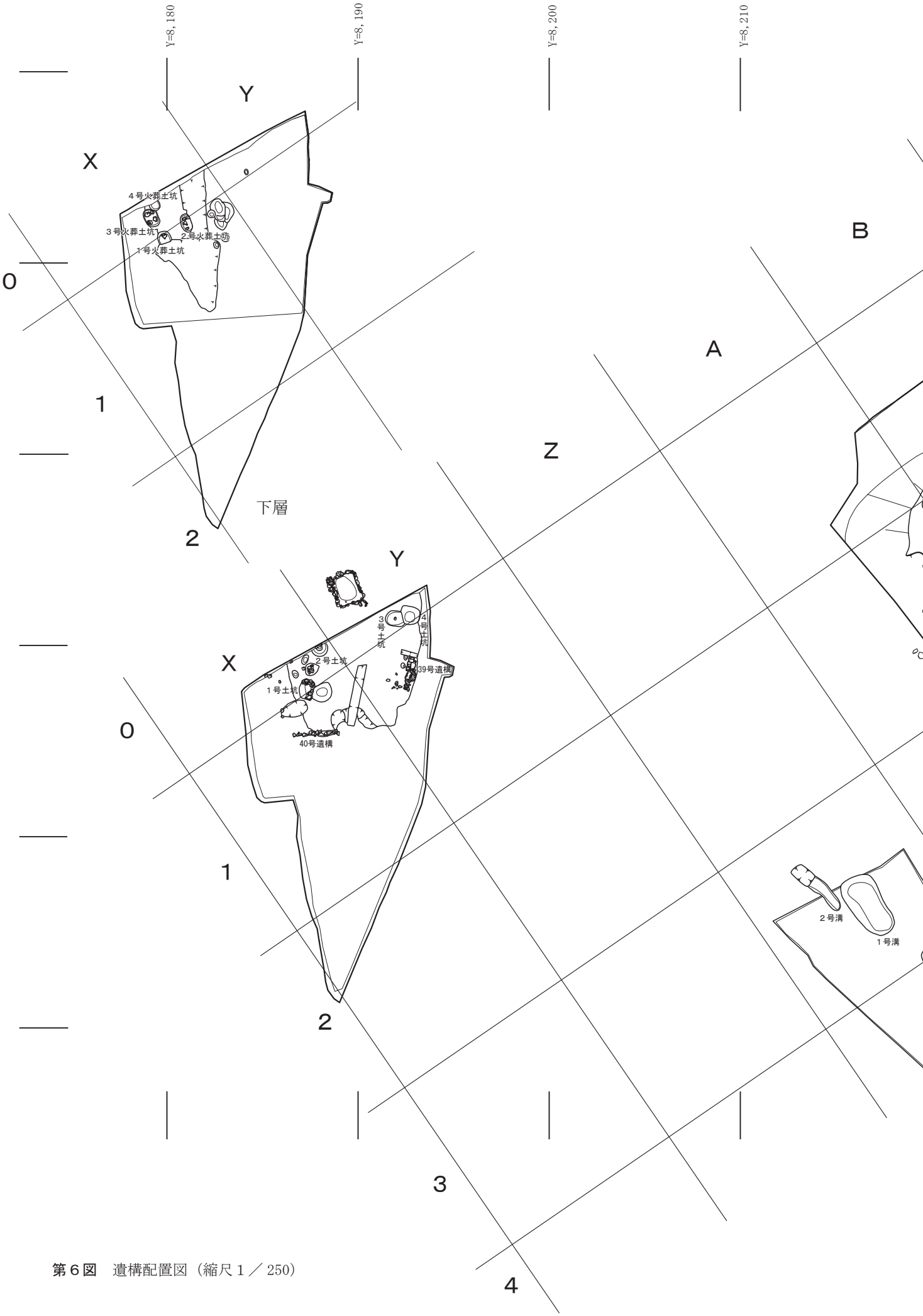
次に、墓ではないが集石・配石・石造物等が見られるものをそれぞれ､集石遺構・配石遺構・墓標遺構と呼称する。また、土坑内から焼土および一定量以上の炭化物を検出し、その場所において火葬行為が行われたことが疑われる物については本来的な意味で埋葬施設とは異なるため火葬施設とする。

第３節　遺物出土状況

中世墓に伴う遺物は、石造物が主である。石造物は、一石五輪塔、組み合わせ式五輪塔の部材で、空風輪、火輪、水輪、地輪と宝篋印塔、板碑、石仏等がある。石造物の石材は安山岩が多く、花崗岩、笏谷石がわずかにみられる。


F
E
D
C
B
A
Z
Y
X
W0
1
2
3
4
①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
38.500m
35.500m
35.000m
34.000m
32.500m
32.000m
31.500m
31.000m
30.500m
18.500m
18.000m
17.500m
17.000m
表土
盛土
崩落土
谷埋土
地山

第５図　基本層序



第６図　遺構配置図（縮尺１／250）

Y=8,220
Y=8,230
Y=8,240
Y=8,250
Y=8,260
X=-38,260
X=-38,270
X=-38,280
X=-38,290
X=-38,300
X=-38,310
C
D
E
1号遺構
2号遺構
3号遺構
4号遺構
5号遺構
6号遺構
7号遺構
8号遺構
9号遺構
10号遺構
11号遺構
12号遺構
13号遺構
14号遺構
15号遺構
16号遺構
17号遺構
18号遺構
19号遺構
20号遺構
21号遺構
22号遺構
23号遺構
24号遺構
25号遺構
26号遺構
27号遺構
28号遺構
29号遺構
30号遺構
31号遺構
32号遺構
33号遺構
34号遺構
35号遺構
36号遺構
37号遺構
38号遺構
近世墓
0
10
20m

第４章　遺構と遺物

第１節　遺構（第７～15図）

遺構番号は、区画墓・配石遺構・集石遺遺・墓標遺構関係なく１からの通し番号であり、整理段階で前述した各遺構を再検討したため欠番がでた。また、一部の遺構には枝番をつけたものもある。

Ⅰ　集石・配石

１号遺構（第８図）　Ｃ－０・１に位置する。地表上に河原石による配石を施し、平面形は長方形を呈す。下部から骨片は出土していない。

２号遺構（第７図）　Ｄ－１に位置する。地表上に河原石を一辺約1.50mの「ロ」の字状に配石を施す。その直下で土坑を検出し、径約1.00mの円形を呈し､深さ0.83mを測る。土坑は谷埋土中に構築され骨片は出土しなかったが、形状から墓と推察される。時期は､出土遺物がないため不明である。

５号遺構（第７図）　Ｃ－２に位置し、地表上に河原石が認められた。その直下に浅い落ち込みが検出されたが、骨片は出土していない。

８号遺構（第７図）　Ｃ－２に位置し、地表上に河原石や石造物片が認められた。その直下に浅い落ち込みが検出されたが、骨片は出土していない。

10号遺構（第７図）　Ｃ－２に位置し、地表上で玉石上に河原石や石造物が認められ、その直下から土坑が検出された。土坑は地山を掘り込んで構築され、長軸2.24m、短軸1.62m、深さ0.38mを測り、平面形は楕円形を呈す。土坑の埋土から骨片は出土していない。

12号遺構（第７図）　Ｃ－３・４に位置し、地表上で河原石のまとまりが３カ所で認められため、12－１から３に分けた。12－１は河原石数個が配され、直下かに浅い落ち込みが認められたが、骨片は出土していない。12－２は河原石数個が配され、近辺に板碑が倒れた状態で検出した。河原石の直下で浅い落ち込みが認められたが、骨片は出土していない。12－３は河原石２個が配されその直下に土坑を検出した。土坑は地山を掘り込んで構築され、長軸0.68m、短軸0.53m、深さ0.33mを測り、平面形は円形を呈す。土坑埋土からは骨片は出土していない。

15号遺構（第８図）　Ｂ・Ｃ－４に位置し、地表上で河原石と瓦が認められ、その直下から土坑が検出された。河原は土抗上面に敷かれており､その上に板碑が立った状態で検出された。土坑は､径約0.60m、深さ0.33mを測り、平面形は円形を呈し、骨片は出土しなかった。

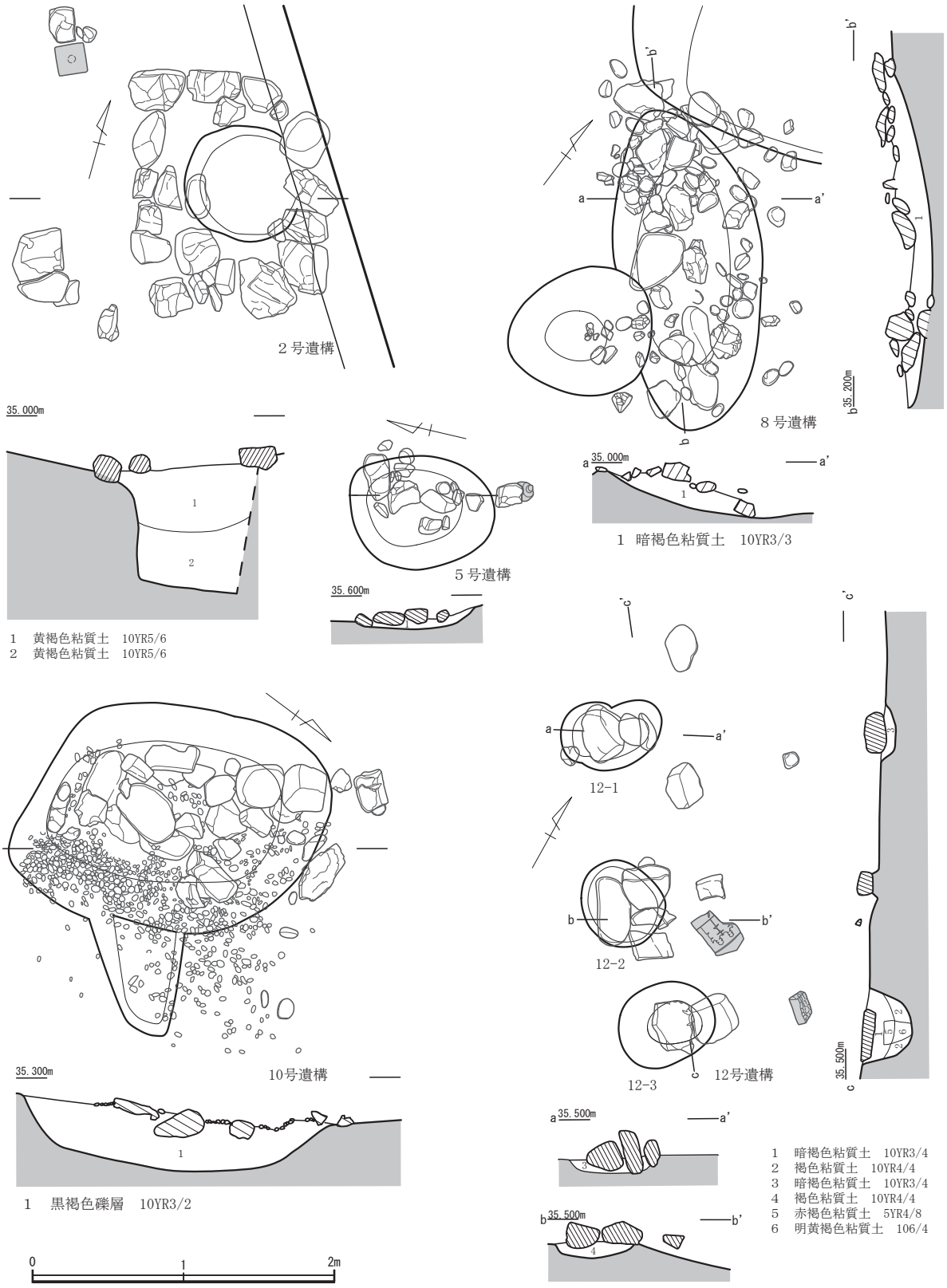
33号遺構（第８図）　Ｃ－３に位置し、地表上で河原石が認められ、その直下で土坑が検出された。集石は土坑内へ落ち込んでおり、土坑に伴うものと考えられる。土坑は長軸0.86m、短軸0.58m、深さ0.70mを測る、平面形が円形を呈す。地山を掘り込んで構築され､骨片は出土しなかった。

29号遺構（第８図）　Ｂ－２に位置し、河原石がロの字状から崩れた状態で認められ、その下部で土坑を検出した。土坑は、径約0.40m、深さ0.34mを測り、平面形は円形を呈す。埋土からは骨片は出土しなかった。

Ⅱ　墓標遺構

３号遺構（第９図）　Ｃ－１に位置し、地表上に五輪塔火輪１点、同地輪３点が散在しており、下部から骨片は検出されなかった。

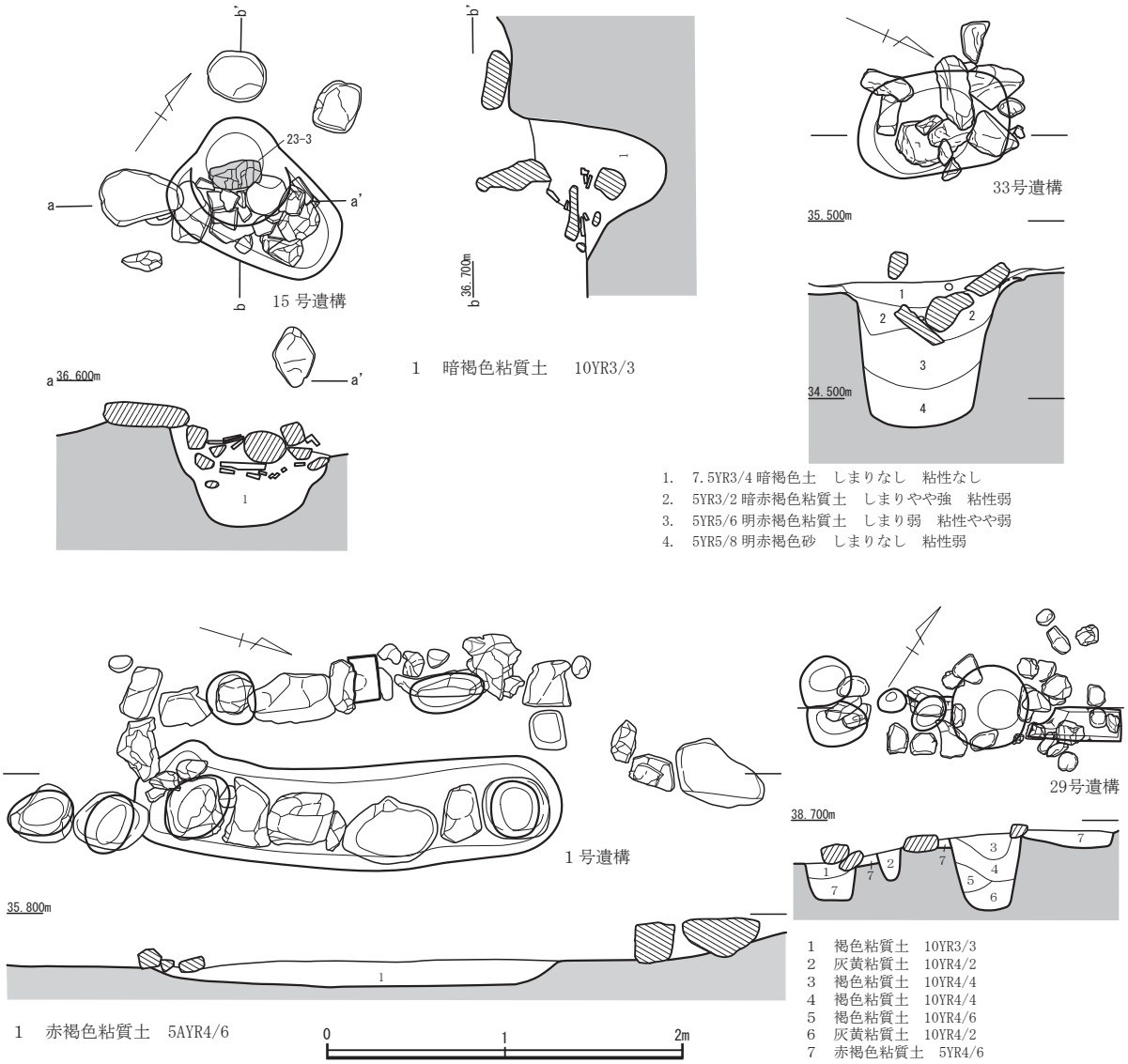
４号遺構（第９図）　Ｃ－１・２に位置し、河原石や石造物で不揃いな長方形の配石を施す。北隅で板碑が倒れた状態で検出された。下部から骨片は出土していない。



第７図　遺構実測図１（縮尺１／40）

６号遺構（第９図）　Ｃ－２に位置し、地表上に拳大の河原石と石仏が認められた。下部には浅い落ち込みが検出されたが、骨片は出土していない。

７号遺構（第９図）　Ｃ－２に位置し、地表上に拳大の河原石とともに石仏が認められ、石仏は破損



第８図　遺構実測図２（縮尺１／40）

している。その直下で土坑を検出したが、骨片は出土していない。

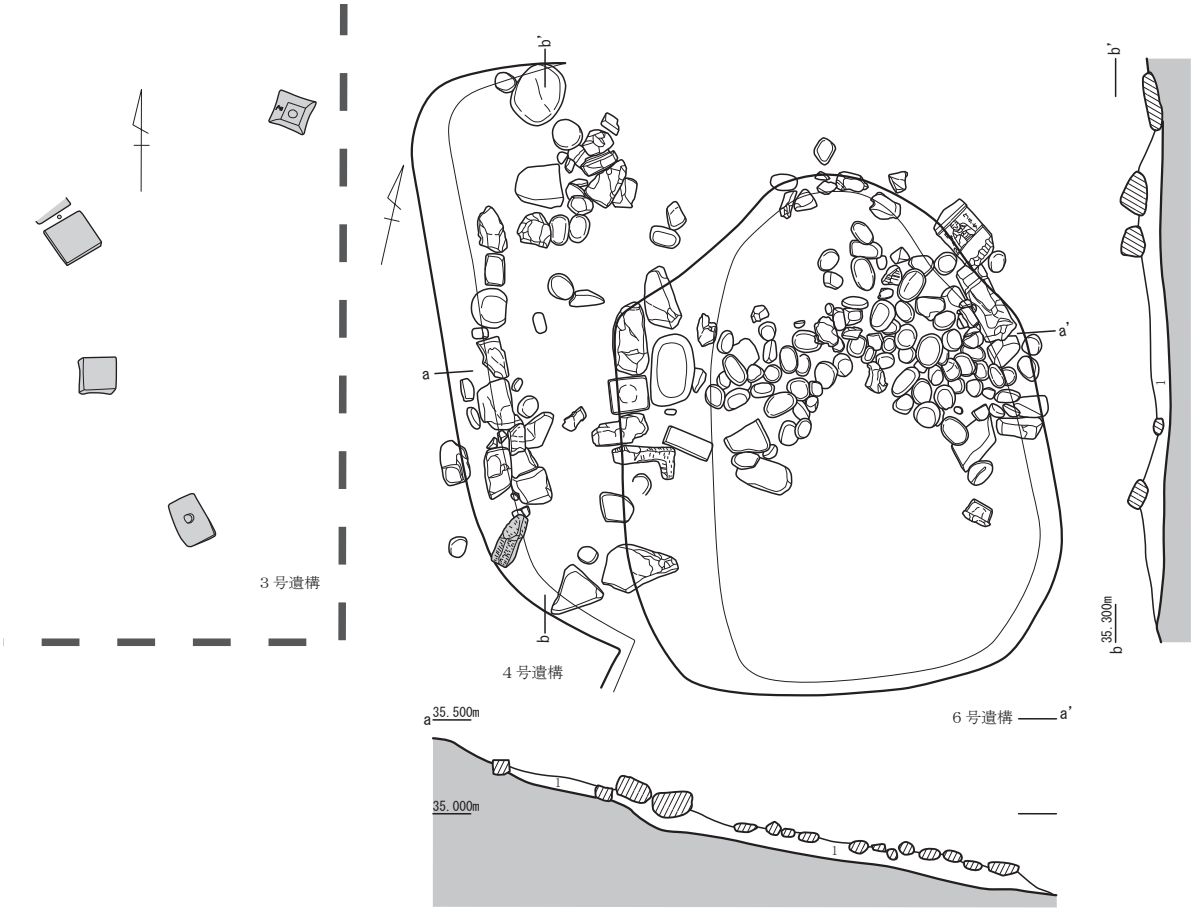
９号遺構（第９図）　Ｃ－２に位置し、土坑上面で、五輪塔空風輪・水輪や河原石が散乱していた。土坑は、長軸0.78m、短軸0.65mの平面形が隅丸方形をし、深さ0.56mを測る。周辺の状況から土抗上面に五輪塔が立っていたとは考えられず、また土坑覆土から骨片は出土していない。

11号遺構（第10図）　Ｃ－３・４に位置し、玉石や河原石とともに五輪塔の各部が散乱する。北西で配石の一部が見られることから玉石が残存する箇所および南端で配石が認められる箇所には石造物が建っていた可能性が考えられる。

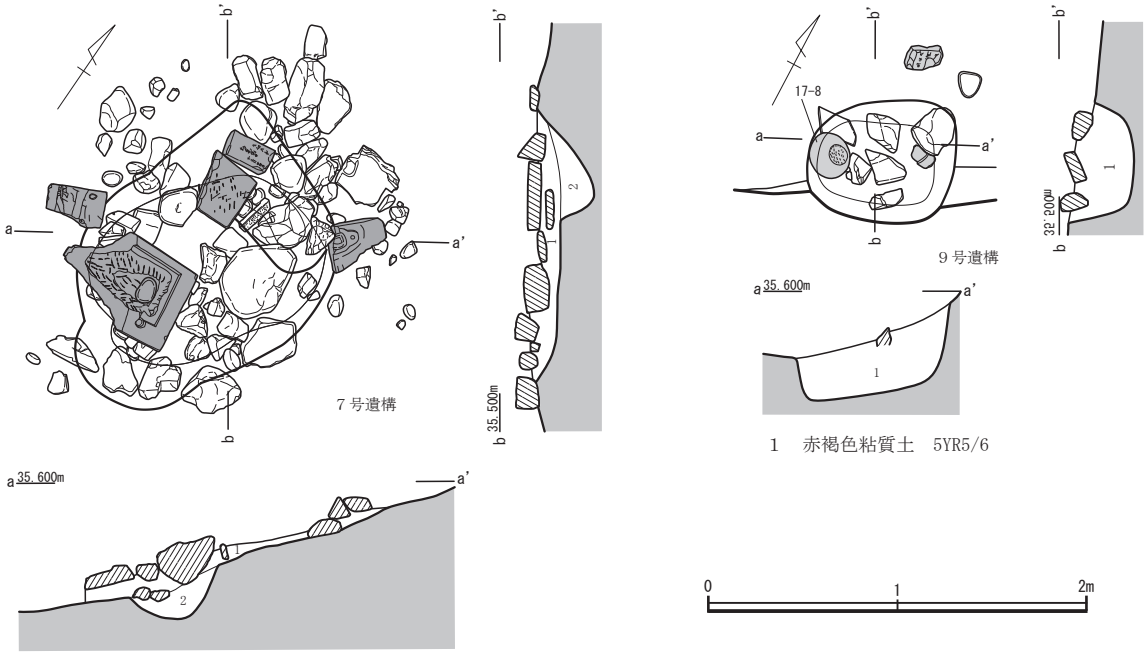
13号遺構（第10図）　Ｃ－４に位置し、石仏・空数輪・台座や河原石が散乱する。その南端で石仏と台座が隣接している。下部で土坑状の落ち込みが検出されたが、骨片は出土していない。

14号遺構（第11図）　Ｃ－４に位置し、石造物の配置から14－１から３にわけた。

14－１は一石五輪塔と板碑が倒れた状態で検出された。下部で土坑を検出したが、骨片は出土していない。14－２は一石五輪塔・板碑２体が倒れた状態で検出された。下部構造は検出されなかった。14－３は一石五輪塔と板碑が倒れた状態で検出された。直下で土坑を検出したが、骨片は出土していない。



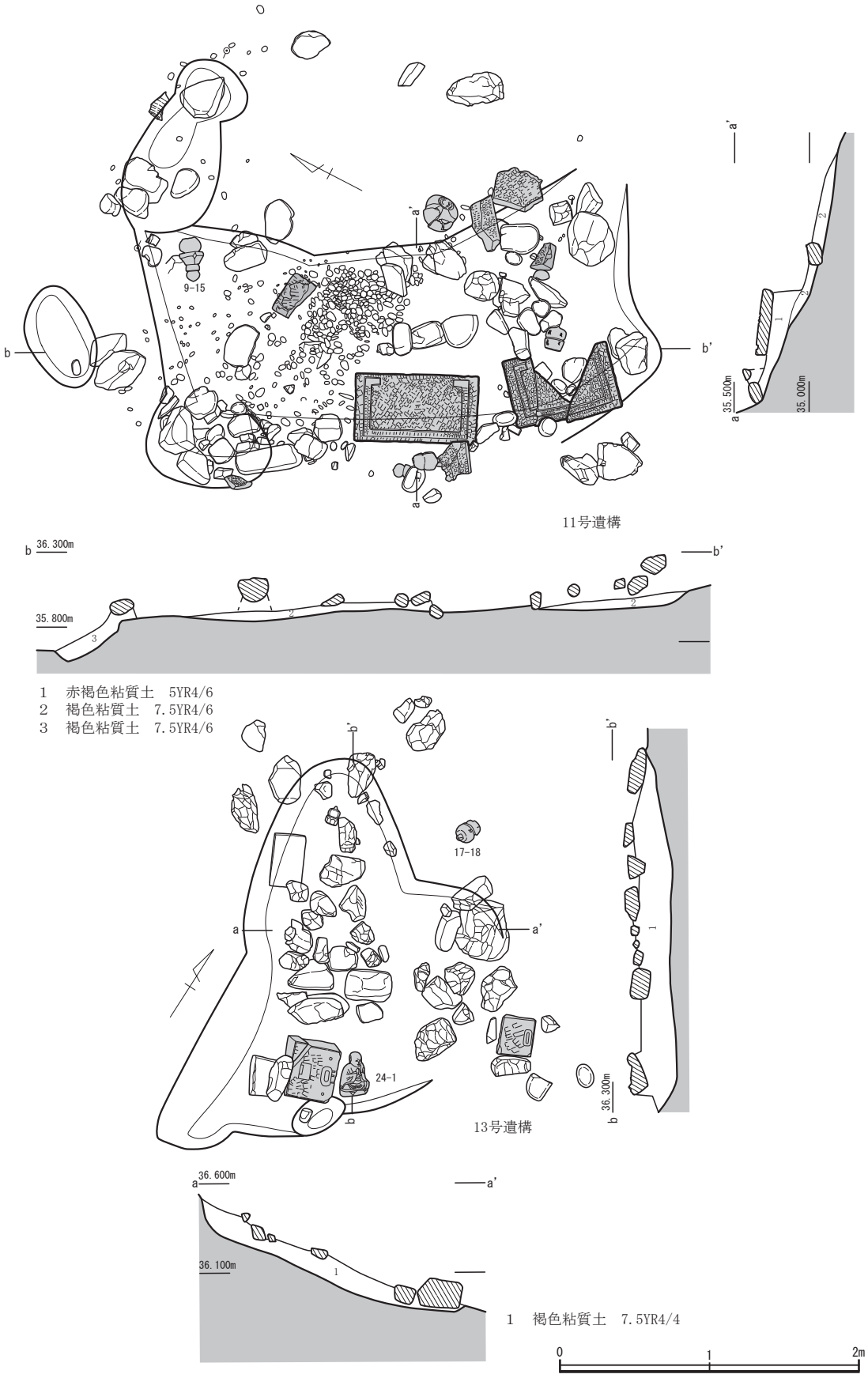
1　赤褐色粘質土　5YR5/6



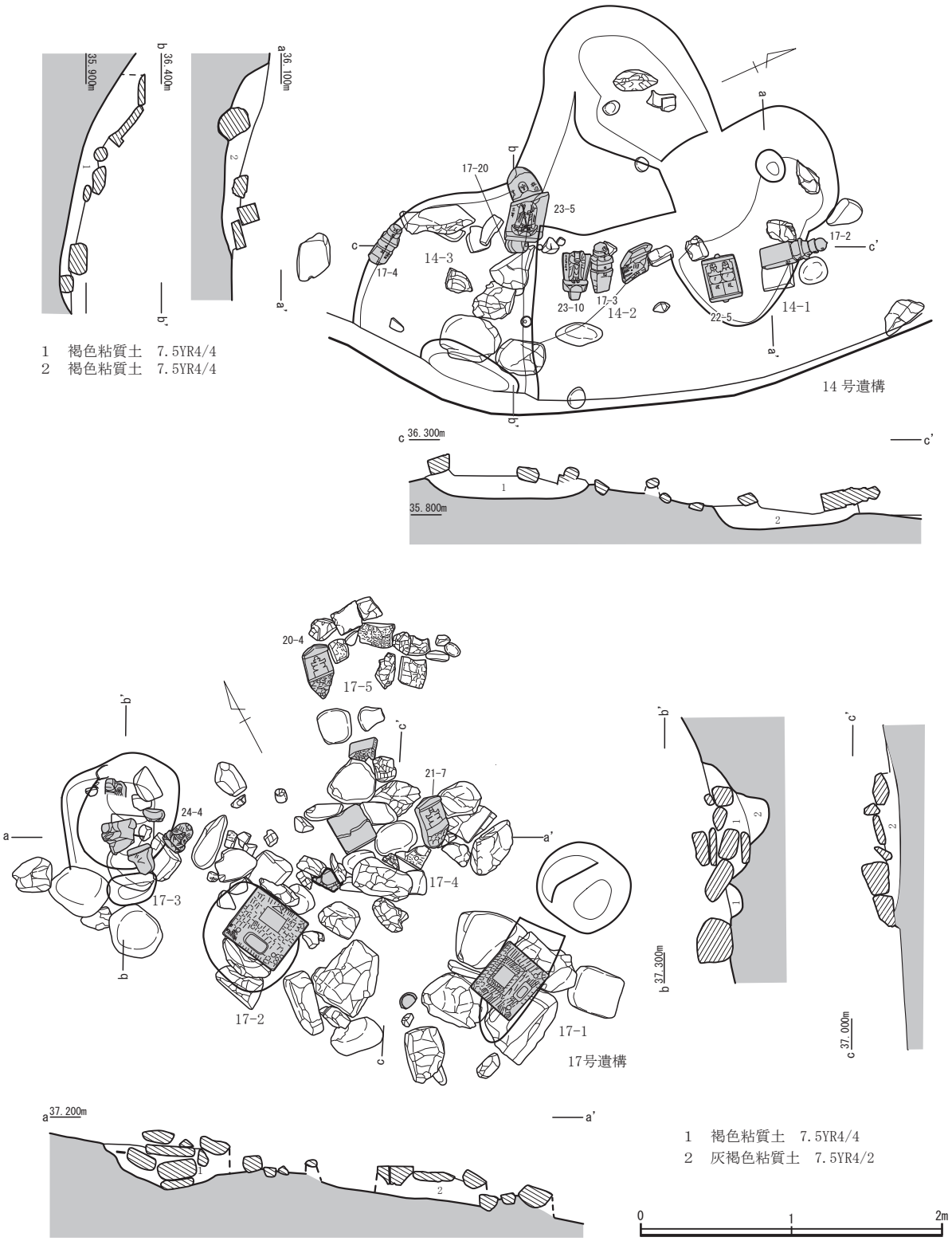
1　赤褐色粘質土　5YR5/6

1　黒褐色粘質土　10YR2/2
2　褐色粘質土　10YR4/6

第９図　遺構実測図３（縮尺１／40）



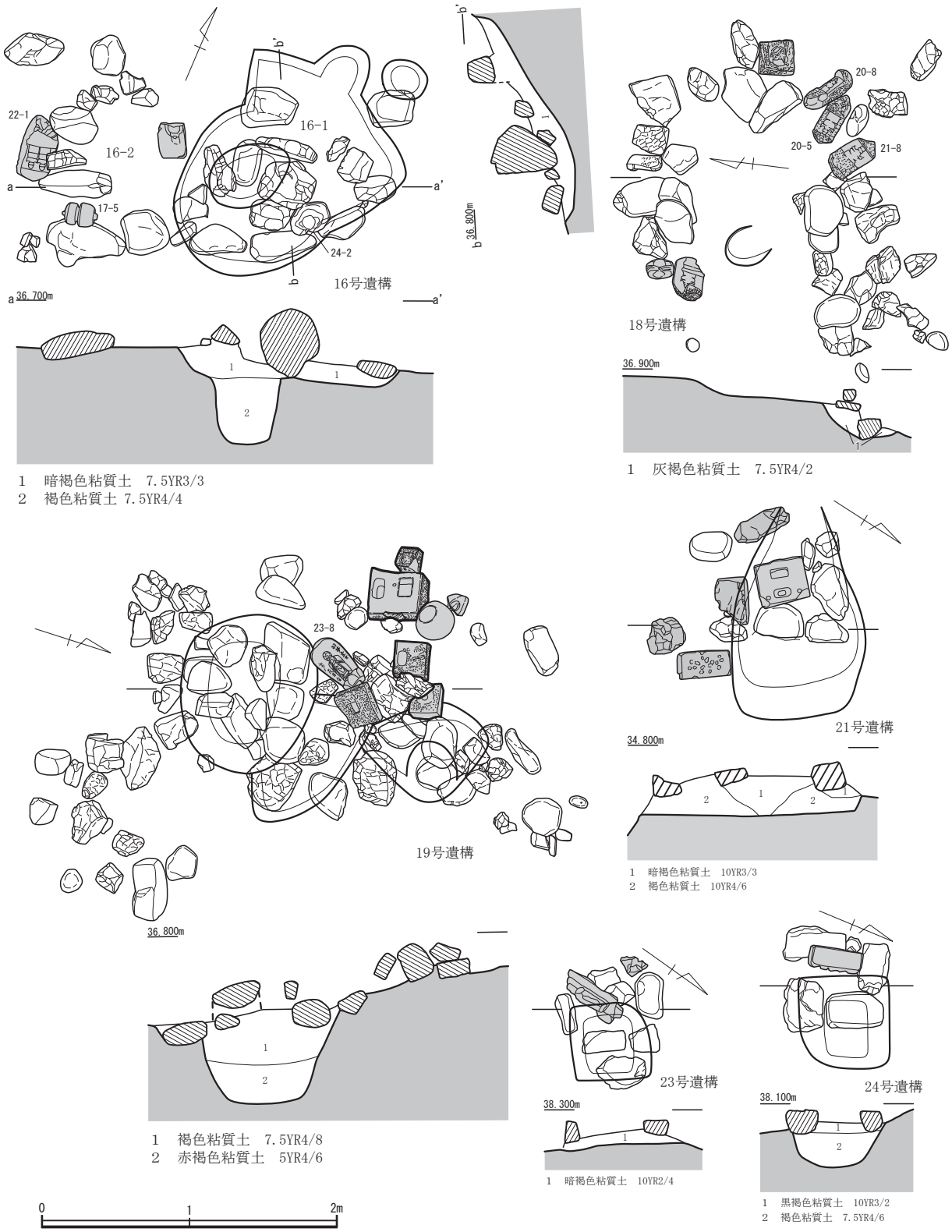
第10図　遺構実測図４（縮尺１／40）



第 11 図　遺構実測図５（縮尺１／40）

16号遺構（第12図）　Ｂ－３に位置し、石造物や河原石が散乱している。石造物の配置から16－１・２に分けた。

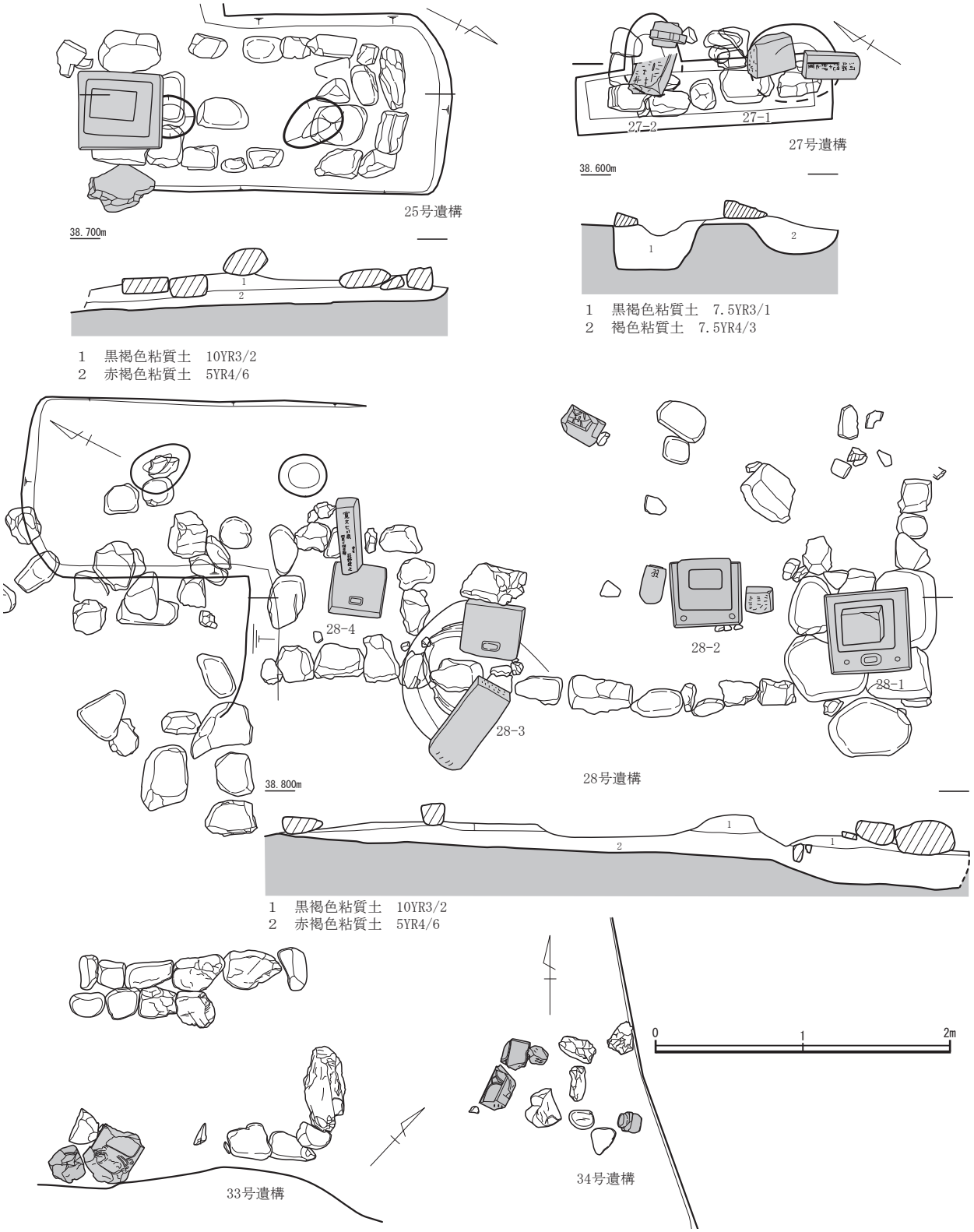
16－１は石仏が立った状態で検出され、その直下で土坑を検出したが、骨片は出土されなかった。16－２は倒れた状態の板碑２体と近隣に五輪塔空風輪が検出されたが、下部からは骨片は出土していない。



第 12 図　遺構実測図６（縮尺１／40）

17号遺構（第11図）　Ｂ－３に位置し、地表上に河原石や石造物が散乱している。石造物の配置から17－１から５に分けた。

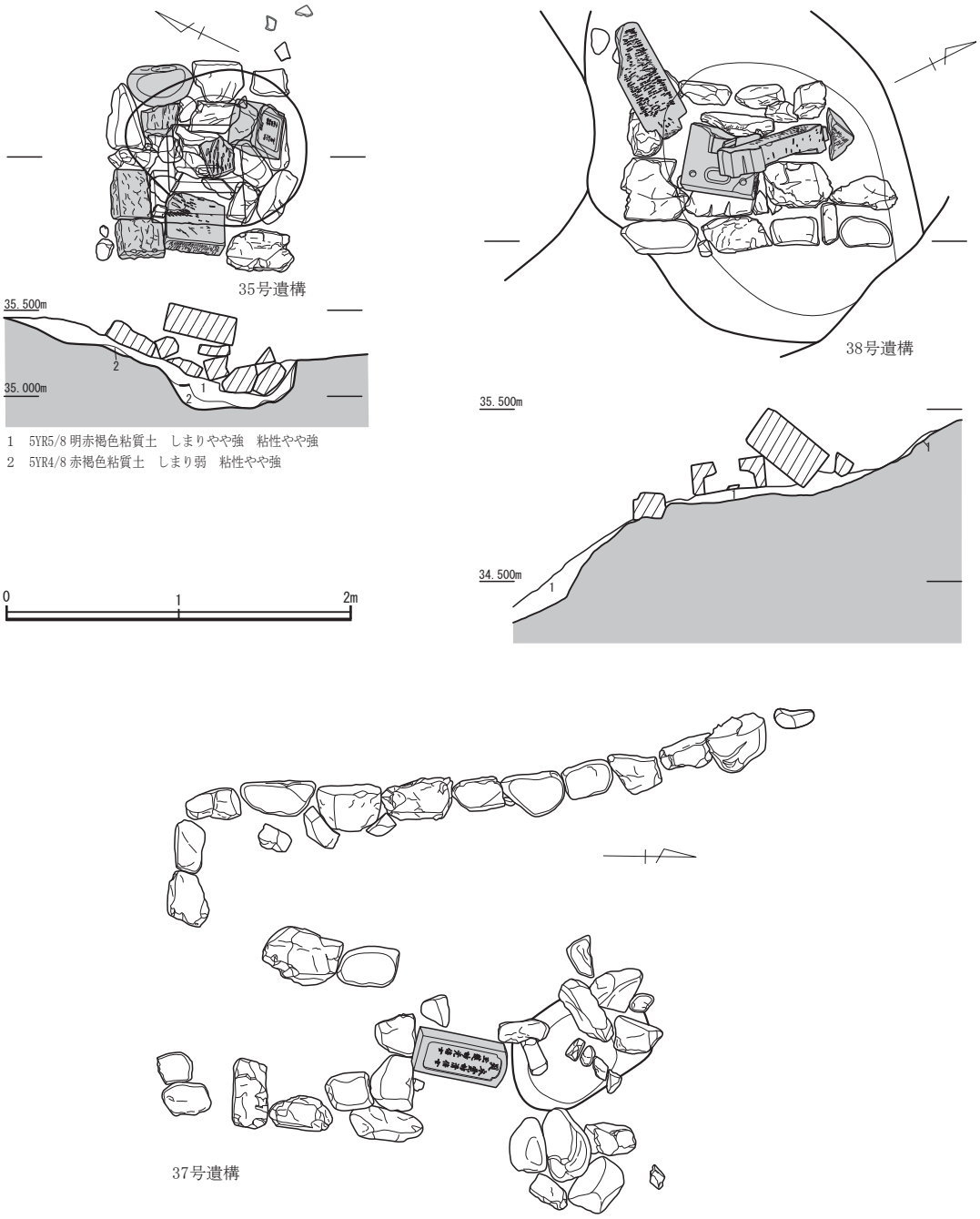
17－１は1北端にあり、扁平な河原石が方形状に配されたその上に台座が座っている。17－２は扁平な河原石の上に台座が座っている。その直下に、浅い落ち込みが人骨は検出されなかった。17－３は土



第 13 図　遺構実測図７（縮尺１／40）

坑底面から扁平な河原石を数段据えその上に石仏が置かれていたと推察する。17－４は河原石がロの字状に配されていたと考えられ、その中央に板碑がやや傾いた状態で検出された。17－５は河原石が散乱する近辺で板碑が倒れた状態で検出された。これらの下部から骨片は出土していない。

18号遺構（第12図）　Ｂ－３に位置し、コの字状に河原石が配石されいる。その南東隅に板碑２体と



第 14 図　遺構実測図８（縮尺１／40）

台座が、その対角の北西隅に板碑２体を安置されていた。下部からは骨片は出土していない。

19号遺構（第12図）　Ａ・Ｂ－３に位置し、土坑上に河原石が認められ、その北側に板碑・水輪・台座が散乱していた。下部からは骨片は出土していない。

21号遺構（第12図）　Ａ・Ｂ－２・３に位置し、板状の石造物上に方形に河原石が配石されその中央に台座が配置されていた。下部から骨片は出土していない。

23号遺構（第12図）　Ａ－２に位置し、崩れかけた方形状に河原石が配されその中央に板碑が横倒しの状態で検出した。下部からは骨片は出土していない。

24号遺構（第12図）　Ａ－２に位置し、長方形をした河原石４石を方形に配し、中央に板碑を置く。その直下に１辺約0.6m四方で、深さ0.23mの土坑を検出したが、骨片は出土していない。

25号遺構（第13図）　Ａ－１に位置し、河原石を長方形に配し、南端には表面が平らな河原石を敷き墓石が座っている。下部からは骨片は出土していない。

27号遺構（第13図）　Ｂ－２に位置し、河原石をＬ字状に２段配しており、27－１・２に分けた。27－１は河原石を５・６石をＬ字に配しその上に台座が座り、竿石が倒れた状態で検出された。その直下で径0.6m、深さ0.25mの土坑を検出したが、骨片は出土していない。27－２は河原石６石をＬ字状に配し、板碑が倒れた状態で検出した。その直下で径約0.6m、深さ0.3mの土坑を検出したが、骨片は出土していない。

28号遺構（第13図）　Ｂ－２に位置し、河原石が横Ｌ字状に配置され、その先端にロの字状に配された河原石が付随する。石造物の配置から28－１～４に分かれる。

28号－１～３は横Ｌ字内にある。28－１は、Ｌ字の角に扁平な石を置きその上に石造物が座っている。28－２は28－１の北に隣接し、石造物が座り、その両脇に加工痕のある安山岩がある。28－３はＬ字の先端部に石造物が倒れた状態で検出された、その北に28－４がある。28－４は河原石が方形に配され、その中央に台座が座り、石造物が倒れていた。いずれも下部から骨片は出土していない。

33号遺構（第13図）　Ｂ－３に位置し、河原石がコの字状に配され、北側の配石は２列である。南東隅に南に石仏が倒れて検出された。下部から骨片は出土していない。

34号遺構（第13図）　Ｂ－３に位置し、地表面に空風輪、火輪、水輪が散在していた。下部から骨片は出土していない。

35号遺構（第14図）　Ｃ－３に位置し、河原石等で約1.00m四方の方形に配された上面で、板碑が安置していた。その下部で長軸1.08m、短軸0.90m、深さ0.26mを測り、平面形が卵形を呈す土坑を検出したが、下部から骨片は出土していない。

37号遺構（第14図）　Ｂ－４に位置し、延長3.80m、幅2.00mのＬ字状でその南側に１辺1.10mのロの字の配石を伴う。ロの字状の配石の頂部から北側へ倒れた状態の板碑を検出した。下部から骨片は出土していない。

38号遺構（第14図）　Ｂ－４に位置し、1.20m×1.00mの方形をした配石の中央部に板碑が倒れた状態で検出した。下部から骨片は出土していない。

Ⅲ　火葬土坑

１号火葬土坑（第15図）　Ｘ－０・１に位置し、約0.70m、深さ0.30mの円形をした土坑で底面に山石が据えられていた。山石は焼けた痕跡があり覆土には焼骨が混入していた。

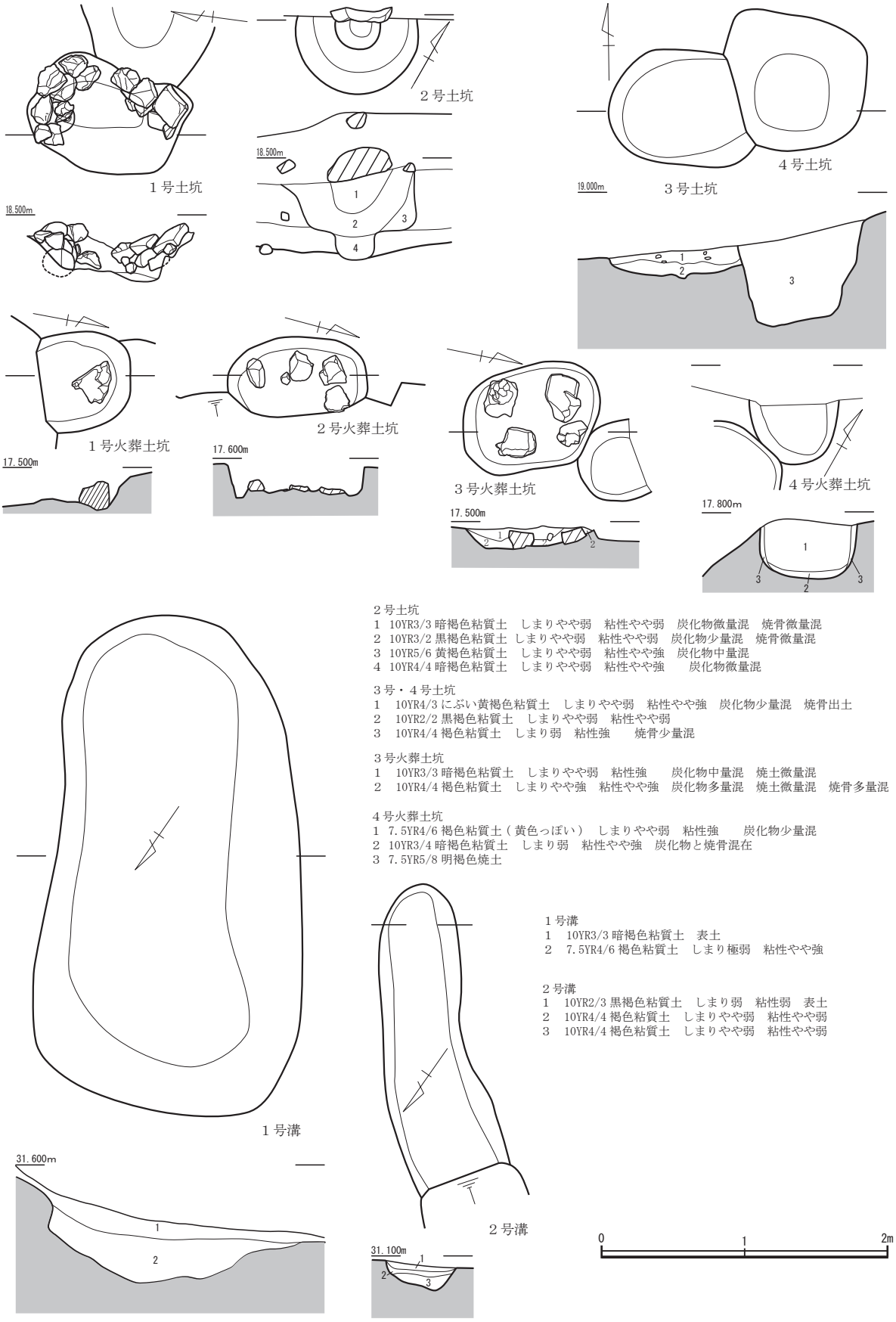
２号火葬土坑（第15図）　Ｘ－０・１に位置し、長軸1.00m、短軸0.55m、深さ0.22mを測る平面形が楕円形の土坑で底面に山石が据えてあり、底面の縁には溝が全周している。山石は焼けており、覆土には焼骨が混入していた。

３号火葬土坑（第15図）　Ｘ－０に位置し、長軸1.04m、短軸0.55m、深さ0.16mの平面形が隅丸方形の土坑で底面に山石が据えてあり、覆土には焼土・炭化物・焼骨が混入し、底面近くでは焼骨が多く見られた。

４号火葬土坑（第14図）　Ｘ－０に位置し、長軸0.62m、短軸0.42m、深さ0.40mで調査区境のため半円形を呈した土坑で側面は焼けており、底面付近の覆土には炭化物や焼骨が混入していた。

Ⅳ　土坑

１号土坑（第15図）　Ｘ－０・１に位置し、長軸1.18m、短軸0.82m、深さ0.30mで、平面形は隅丸



２号土坑
１　10YR3/3 暗褐色粘質土　しまりやや弱　粘性やや弱　炭化物微量混　焼骨微量混
２　10YR3/2 黒褐色粘質土　しまりやや弱　粘性やや弱　炭化物少量混　焼骨微量混
３　10YR5/6 黄褐色粘質土　しまりやや弱　粘性やや強　炭化物中量混
４　10YR4/4 暗褐色粘質土　しまりやや弱　粘性やや強　　炭化物微量混

３号・４号土坑
１　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土　しまりやや弱　粘性やや強　炭化物少量混　焼骨出土
２　10YR2/2 黒褐色粘質土　しまりやや弱　粘性やや弱
３　10YR4/4 褐色粘質土　しまり弱　粘性強　　焼骨少量混

３号火葬土坑
１　10YR3/3 暗褐色粘質土　しまりやや弱　粘性強　　炭化物中量混　焼土微量混
２　10YR4/4 褐色粘質土　しまりやや強　粘性やや強　炭化物多量混　焼土微量混　焼骨多量混

４号火葬土坑
１　7.5YR4/6 褐色粘質土（黄色っぽい）　しまりやや弱　粘性強　　炭化物少量混
２　10YR3/4 暗褐色粘質土　しまり弱　粘性やや強　炭化物と焼骨混在
３　7.5YR5/8 明褐色焼土

１号溝
１　10YR3/3 暗褐色粘質土　表土
２　7.5YR4/6 褐色粘質土　しまり極弱　粘性やや強

２号溝
１　10YR2/3 黒褐色粘質土　しまり弱　粘性弱　表土
２　10YR4/4 褐色粘質土　しまりやや弱　粘性やや弱
３　10YR4/4 褐色粘質土　しまりやや弱　粘性やや弱

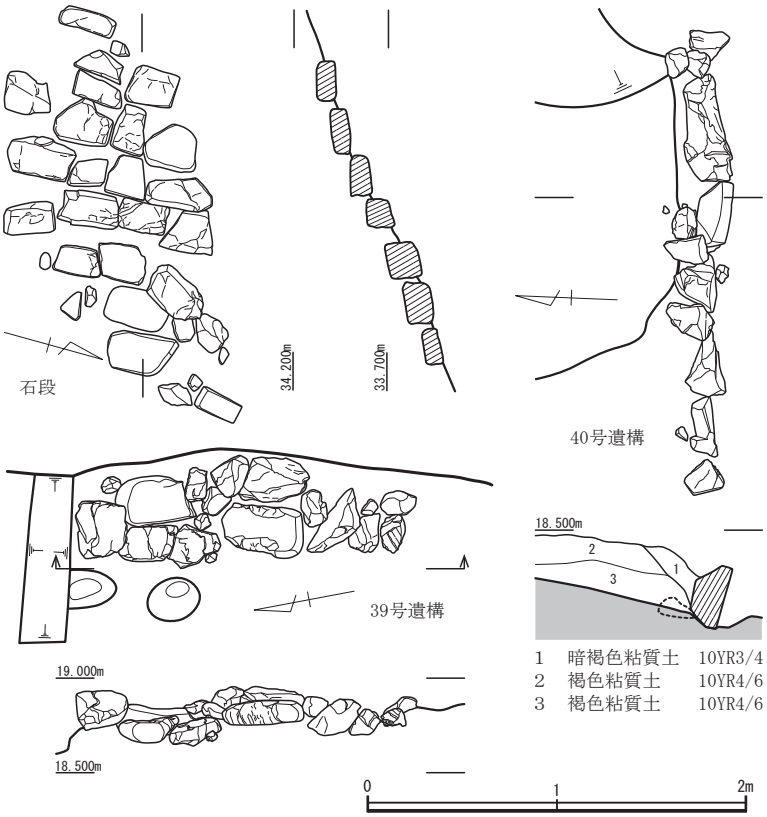
第 15 図　遺構実測図９（縮尺１／40）

方形を呈す。底面に横Ｌ状に山石が据えてある。出土遺物はなく、時期は不明である。

２号土坑（第15図）　Ｘ－０に位置し、調査区にあり、径約0.90ｍの円形を呈し、深さ0.32ｍを測る。底面中央に深さ0.15ｍの小坑を伴う。出土遺物はなく、時期は不明である。

３号土坑（第15図）　Ｙ－０に位置し、径約0.80ｍの平面形が円形を呈し、深さ0.18ｍを測る。覆土には炭化物や焼骨が少量混じる。東縁辺で４号土坑に切られている。出土遺物はなく、時期は不明である。

４号土坑（第15図）　Ｙ－０・１に位置し、長軸0.98ｍ、短軸0.80ｍの平面形が方形を呈し、深さ0.77ｍを測る。覆土に少量の焼骨が混じる。出土遺物はなく、時期は不明である。



第16図　遺構実測図10（縮尺１／40）

Ⅴ　溝

１号溝（第15図）　Ｚ－３に位置し、延長3.00ｍ、最大幅1.90ｍ、深さ0.45ｍを測る。断面形は東側は直に立ち上がり、西側は底面付近から中間付近までは傾斜がきつく、そこから肩までは緩く立ち上げる。出土遺物はなく、時期は不明である。

２号溝（第15図）　Ｚ－３に位置し、延長2.00ｍ、最大幅0.70ｍ、深さ0.17ｍを測る。断面形は逆台形である。出土遺物はなく、時期は不明である。

Ⅵ　その他の遺構

石段（第16図）　尾根東側斜面平坦部の下に位置し、河原石の平坦面を表面に向け、１列３・４石を10㎝の段差をつけ数段配置している。

39号遺構（第16図）　Ｙ－１に位置し、西斜面平坦部に位置し、河原石を延長約1.80ｍで配している。東側は調査区外となっているため全体像は不明である。

40号遺構（第16図）　西斜面平坦部に位置し、延長1.70ｍで１列に配した河原石を境にその北側は盛土となっている。このためこの石列は、土留め用の石垣と考えられる。

第２節　遺物（第 17 ～ 24 図）

遺物は、石造物が大半で土器類は少量であり、かつ小片で図化できなかった。そのため、石造物が主の説明となり、近世のものも一部含まれている。

石造物としては、五輪塔、宝篋印塔、板碑などが出土している。

Ⅰ　五輪塔（第17図）

第17図１～14は一石五輪塔であり、２～14は各部位の側面に梵字が刻まれている。

１～５は空風輪から地輪まで残っている。２の地輪には、梵字の下に「永徳二年　妙□　八月五日」の紀年銘が刻まれている。３の地輪には梵字左に「薙ヵ阿ヵ」の文字が刻まれている。４の地輪には、梵字右に「法果ヵ」の文字が刻まれている。５の地輪下部にホゾがあり、梵字右に「□□禅定門」、左側に「享禄三年」の文字が刻まれている。６は空風輪から水輪が残されたもので、各部側面に梵字が刻まれている。７は空風輪が残されたもので側面に梵字が刻まれている。８は火・水輪が残されたもので、側面に梵字が刻まれている。９は風輪から地輪が残されたもので、風・火輪の一部を欠く。地輪側面の左端部に、「元亀元ヵ□□月ヵ廿三日」の文字が刻まれている。10は火輪の一部と水・地輪が残されたもので、地輪には「寛永十酉癸歳　無ヵ権ヵ律師光慧　成等　成覺ヵ　十一月廿三日」の文字が刻まれている。11 ～ 14は地輪が残されたものある。11の地輪側面には、梵字右に「妙道ヵ禅定尼」、左に「大永六年ヵ十月八ヵ日ヵ」の文字が刻まれている。12の地輪側面には、梵字の下に「元和九稔　妙貞ヵ信女　十二月廿四ヵ日」の文字が刻まれている。13の地輪側面には、梵字の下に「寛永八辛未年大花ヵ国ヵ奉為権ヵ律師俊ヵ全大善ヵ禄ヵ　佛□　十一月四日敬ヵ白」の文字が刻まれている。14の地輪側面には、梵字の下に□□・・戌ヵ　崖ヵ月菩ヵ□禅定尼　七月十九日」の文字が刻まれている。

第17図15～第19図14は、組み合わせ五輪塔である。

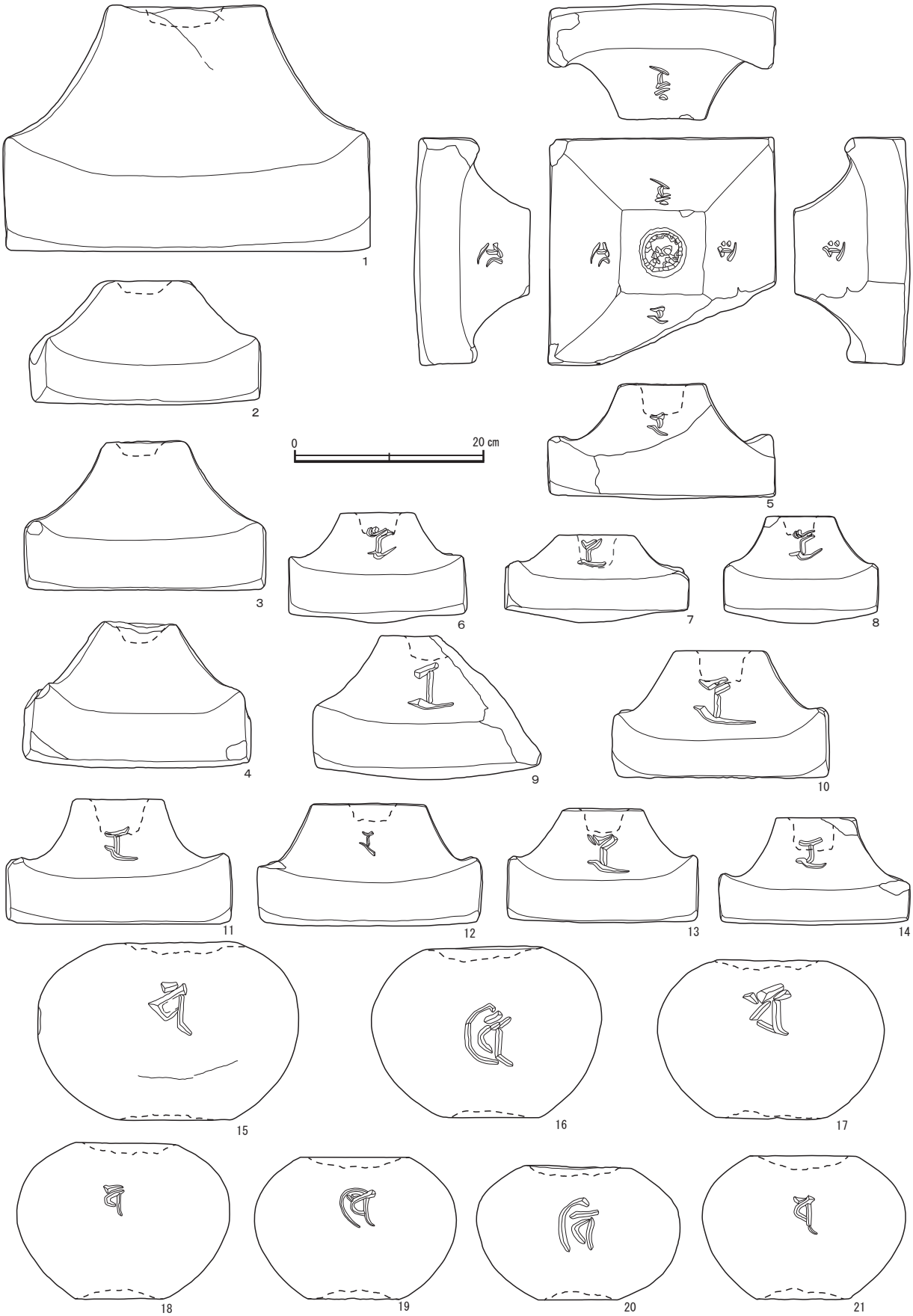
第17図15～21は、空風輪で風輪下部にホゾがある。15～18は空風輪側面に梵字が刻まれている。

第18図１～14は火輪で屋根頂部にホゾ穴がある。１は大型品である。１～４・10～14の底面はほぼ平らであるが、５～８の底面は膨らむ。５～14は側面に梵字が刻まれており、特に５は４側面に梵字が刻まれている。正面が「ラ」、右面が「ラー」、裏面「ラン」、左面が「ラク」である。

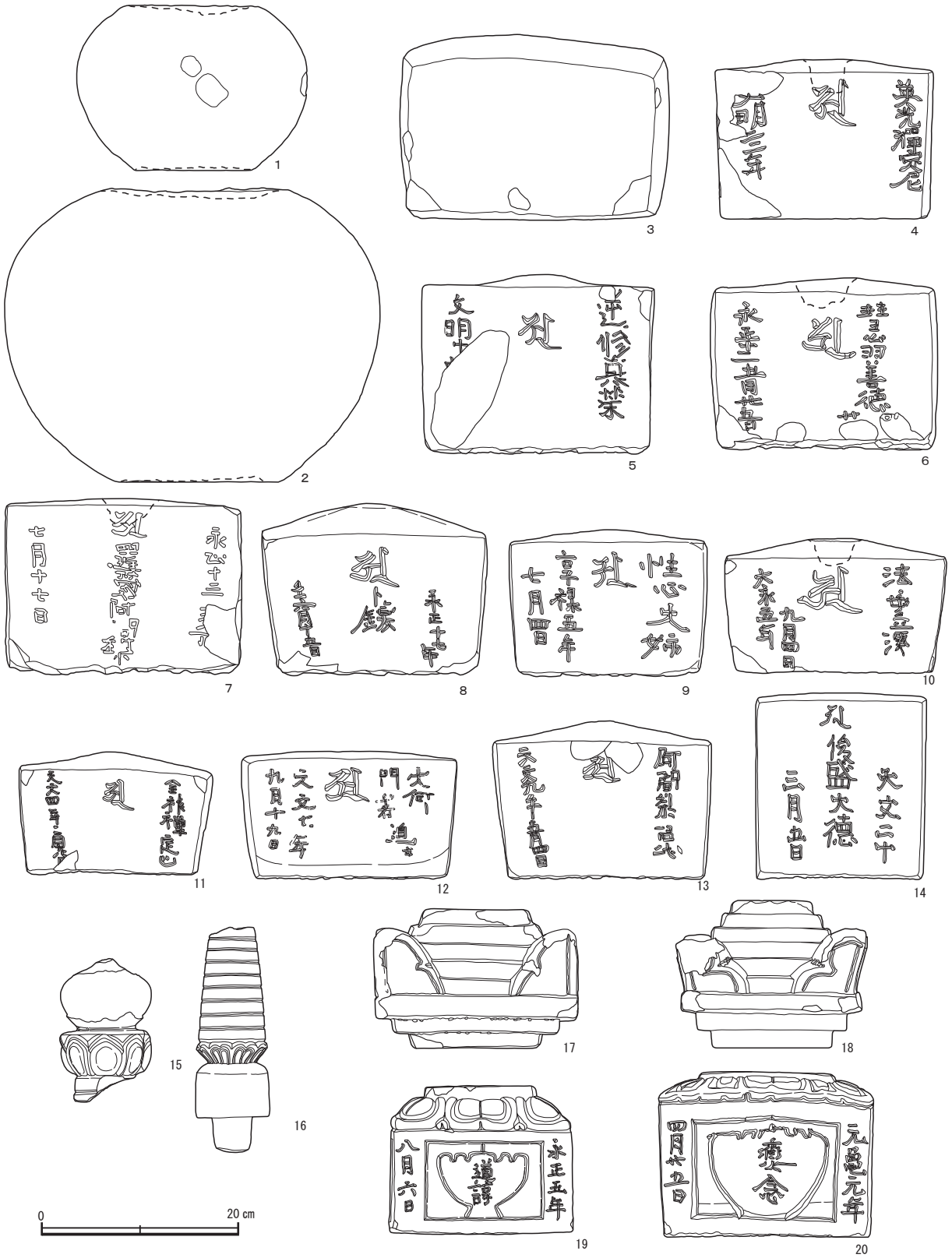
第18図15～21、第19図１・２は水輪で、上・下部にホゾ穴がある。15～21は側面に梵字が刻まれている。第19図２は大型品であり、火輪の第18図１とセットとなるであろう。

第19図３～14は地輪で、３以外は側面に梵字と紀年銘が刻まれており、４・６・７・10の上面にホゾ穴をもつ。14は他に比べ縦長の形態である。４は梵字右に「英光禅定尼」、同左に「文明二二年」の文字が刻まれている。５は梵字右に「逆修真ヵ榮」、同左に「文明十□」の文字が刻まれている。６は梵字右に「彗ヵ翁ヵ善徳□」、同左に「永正十二五月廿五日」の文字が刻まれている。７は梵字下に「永正十三□子ヵ□」／「□□阿闍ヵ梨ヵ」／「七月十七日」の文字が刻まれている。８は梵字右に「永正十七年」、同下に「鑁カ」、同左に「壬六月十五日」の文字が刻まれている。９は梵字右に「性心大姉」、同左に「享禄五年　七月四日」の文字が刻まれている。10は梵字右に「法□□法」、同左に「大永五年九月四日」の文字が刻まれている。11は梵字右に「全祥ヵ禅定尼」、同左に「天文四年二月廿ヵ八ヵ日」の文字が刻まれている。12は梵字右に「大ヵ何／門□／道ヵ□」、同左に「九月十ヵ九日」の文字が刻まれている。13は梵字右に「阿闍ヵ梨ヵ□□」、同右に「天文九午(年)五月四日」の文字が刻まれている。14は梵字下に「天文二十」／「俊ヵ盛大徳／三月五ヵ日」の文字が刻まれている。梵字はいずれも地輪が「ア」、水輪が「バ」、火輪が「ラ」、風輪が「カ」、空輪が「キャ」である。

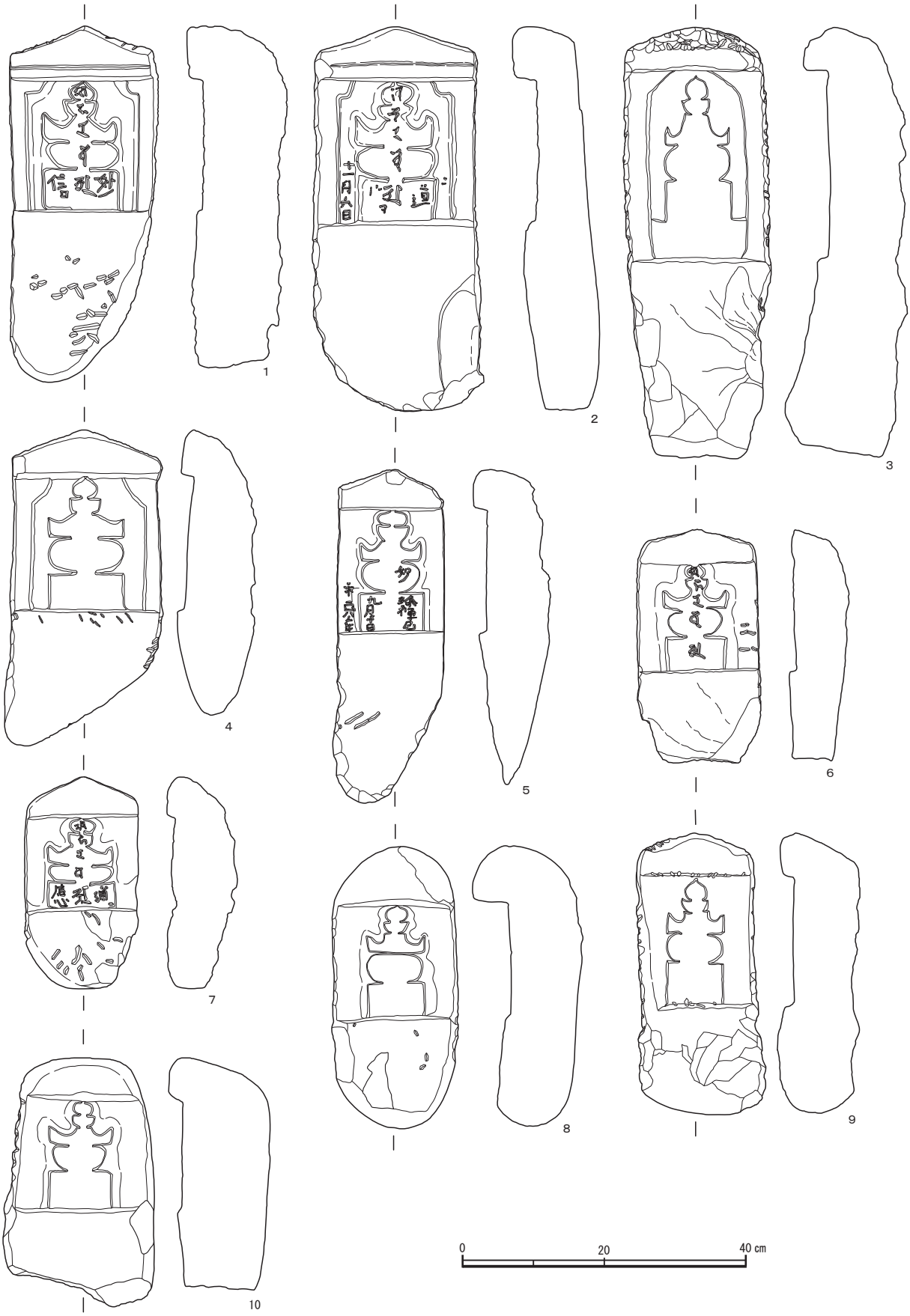
第 17 図　遺物実測図１（縮尺１／６）



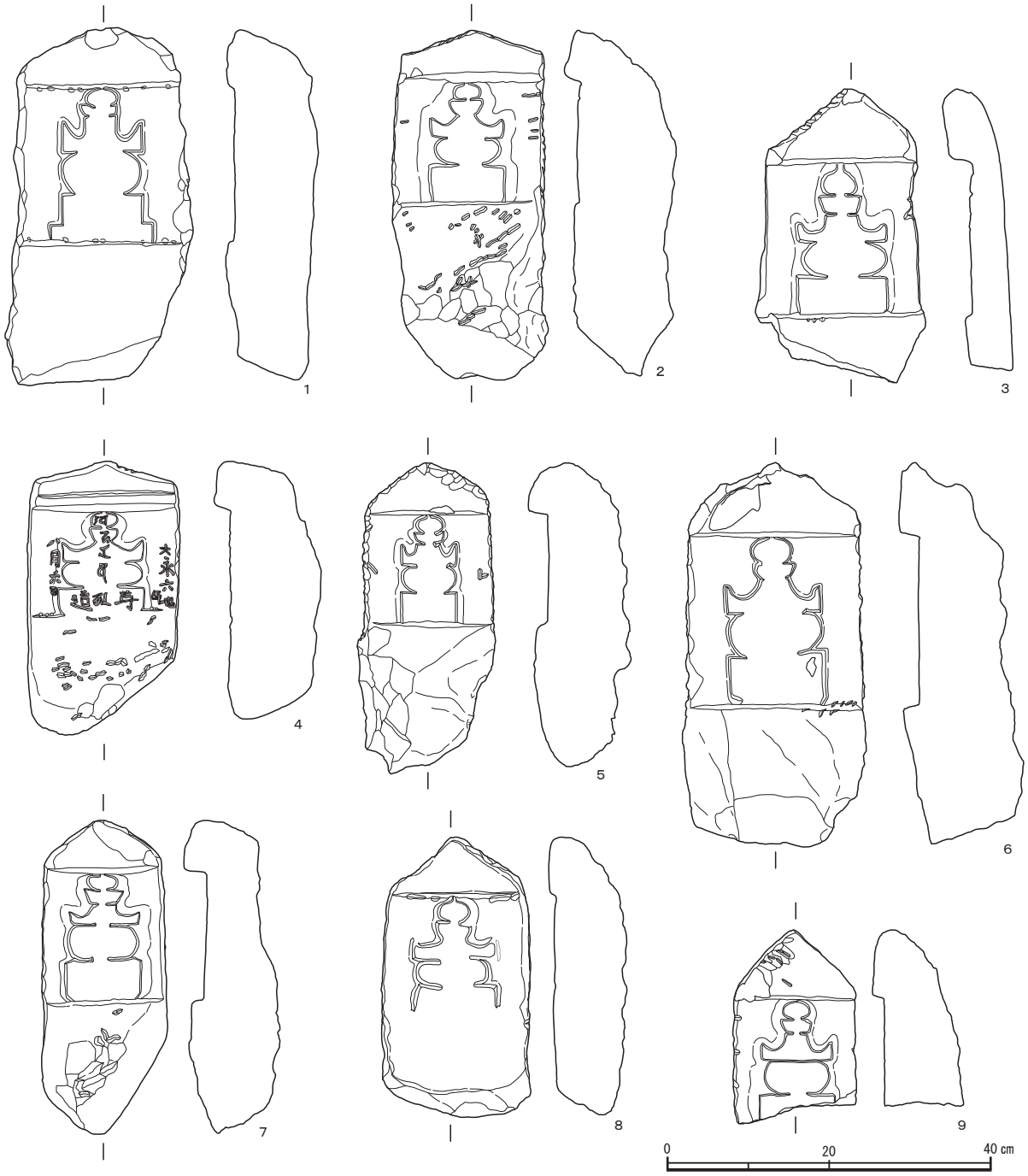
第 18 図　遺物実測図２（縮尺１／６）



第 19 図　遺物実測図３（縮尺１／６）



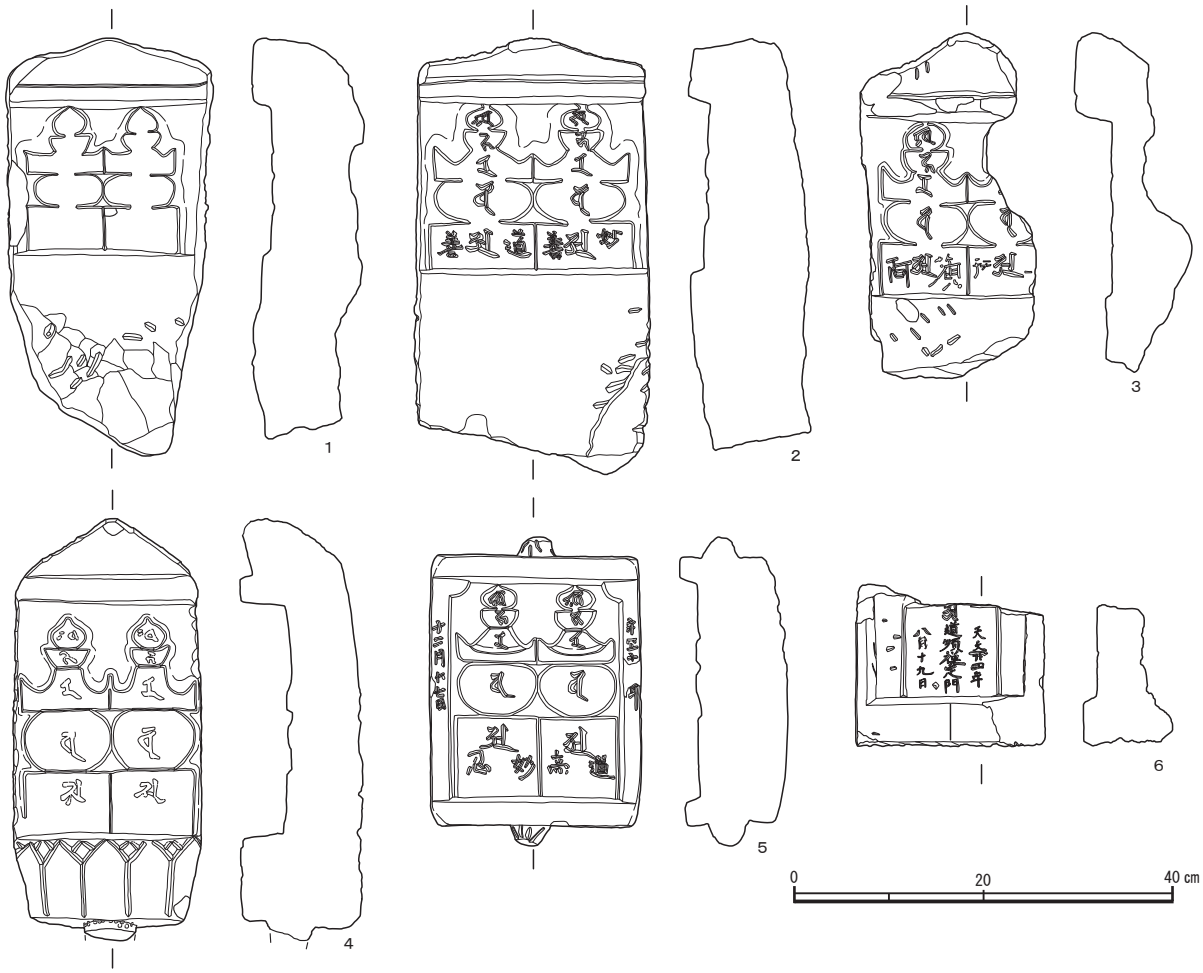
第20図　遺物実測図４（縮尺１／８）



第 21 図　遺物実測図５（縮尺１／８）

Ⅱ　宝篋印塔

第19図15～20は宝篋印塔である。15は相輪の宝珠と請花である。16は相輪の九輪・請花・伏鉢であり、伏鉢は無地で底部にホゾをもつ。17・18は笠部で、上・下部にホゾ穴がある。17は上部６段下部３段、18は上部５段下部３段である。隅飾突起は17がほぼ直立し、18はやや外へ開く。隅飾突起の形態はともに２弧輪郭形である。19・20は基礎で、上部段形に反花を刻み、側面に一区画の格狭間をもつ。19の格狭間内に「道諄」、格狭間右に「永正五年」、同左に「八月六日」の文字が刻まれている。20は格狭間内に「□念」、格狭間右に「元亀元年」、同左に「四月廿五日」の文字が刻まれている。



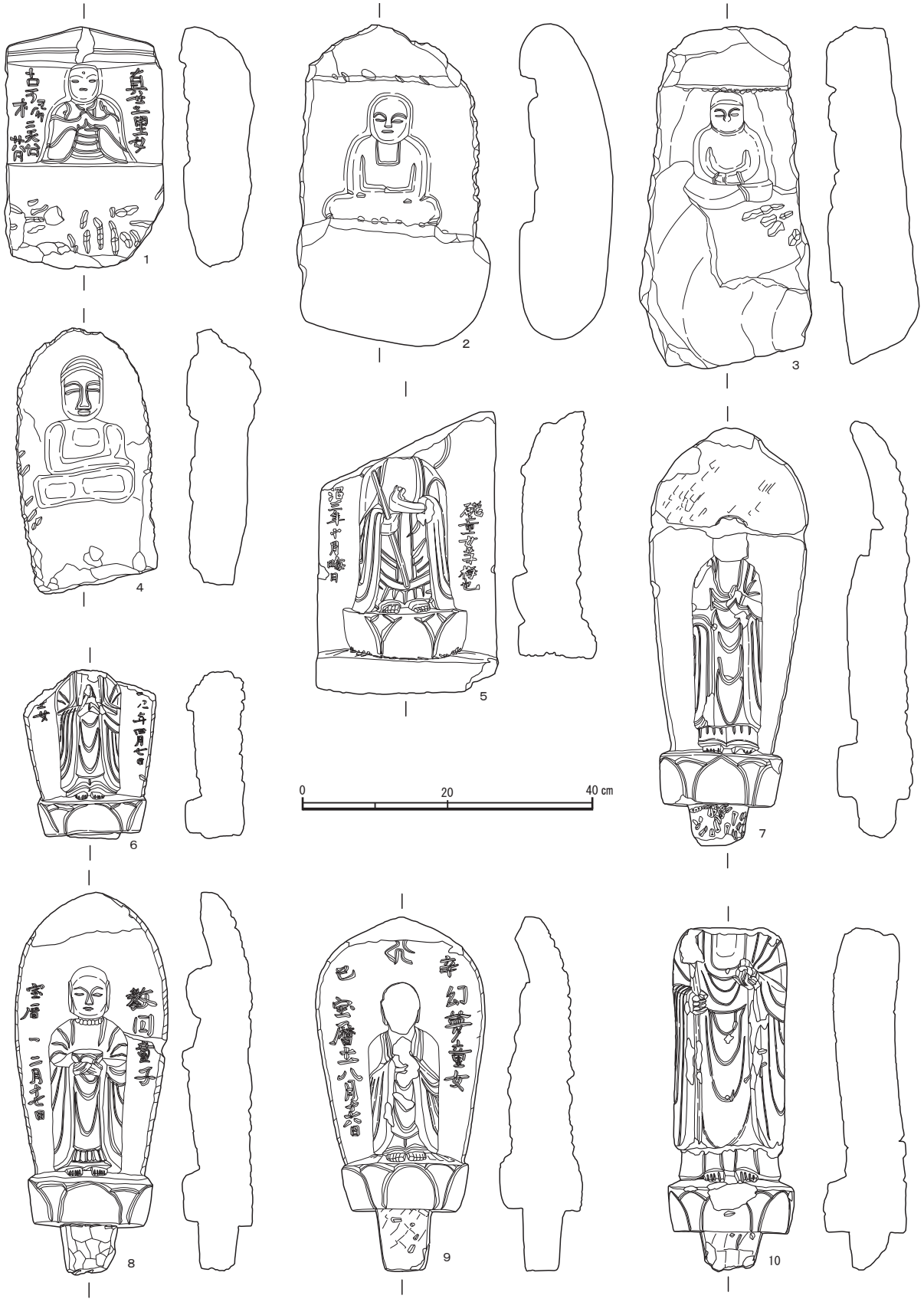
第 22 図　遺物実測図６（縮尺１／８）

Ⅲ　板碑

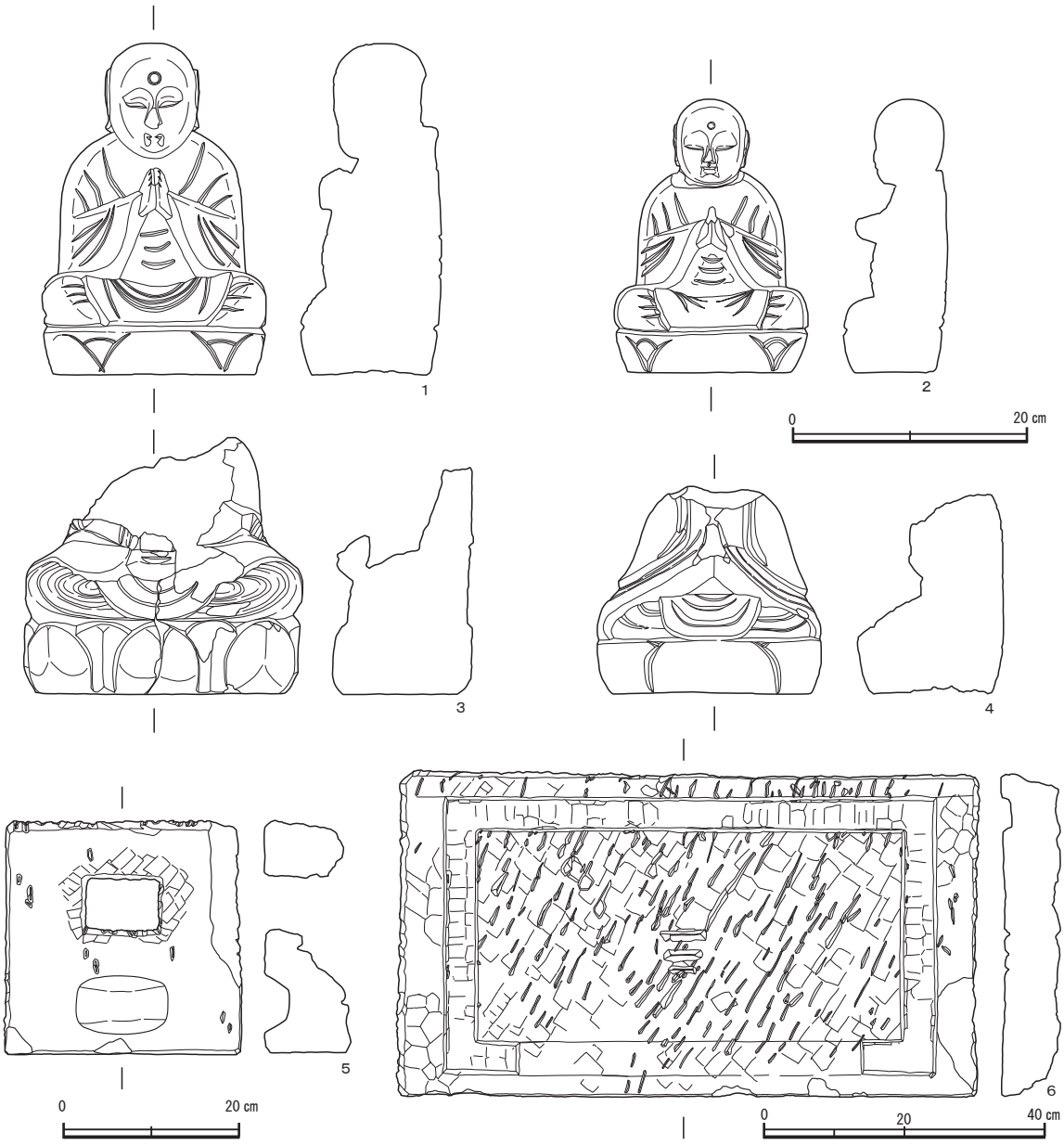
板碑には五輪塔板碑・石龕式板碑・如来座像板碑などがある。板碑は、長方形の原石の一端を削り落として三角の頂部を造り、図像を刻む碑面を一段掘り下げ頂部と基部より低くしている。碑面に五輪塔１基を刻むのが五輪塔板碑で、如来像を刻むのが如来座像板碑である。五輪塔板碑には、碑面に五輪塔１塔を刻む単塔式五輪塔板碑と同面に五輪塔２塔を刻む双塔式五輪塔板碑がある。

第20図１～第21図９は、単塔式五輪塔板碑である。第20図１～４は碑面の周囲に額を有しており、１・２は頂部に１本の条線を刻む。第20図５～10は碑面に五輪塔を所刻する際に周囲を掘り残した結果が額状になったものである。第21図１～３は碑面の五輪塔を線刻で表現している。第21図４～９は碑面の五輪塔が周囲より浮かび上がっているものである。

第20図１・２・６・７・第21図４の五輪塔に地輪から上へ「ア」・「バ」・「ラ」・「カ」・「キャ」の梵字が刻まれている。第20図１の五輪塔地輪には、梵字右に「妙」、同左に「信」の文字が刻まれている。第20図２の五輪塔地輪には、梵字右に「道」、同左に判読できないが文字があり、額の外に「十一月九日」と文字が刻まれている。第20図５の五輪塔水輪右寄りには、「妙」、地輪には「珎ヵ禅ヵ尼　九月十日」、地輪の左に「永正八年ヵ」の文字が刻まれている。第20図７の五輪塔地輪には、梵字右に「道」、同左に「應ヵ」の文字が刻まれている。第21図４は頂部に1本の条線を刻み、五輪塔地輪の梵字右に「尊ヵ」、同左に「道」、五輪塔右に「大永六年」、同左に「八月六日」の文字が刻まれている。



第 23 図　遺物実測図７（縮尺１／40）



第 24 図　遺物実測図８（縮尺１／６・１／８・１／10）

第21図８は他の板碑のように碑面より基部が突出していない。第21図９は他の板碑が陽刻されていたのに対し唯一陰刻で五輪塔を描写している。

第22図１～４は双塔式五輪塔板碑である。１・２は碑面に五輪塔を所刻する際に周囲を掘り残した結果が額状になったもので、頂部に１本の条線を刻む。３・４は碑面の五輪塔が周囲より浮かび上がっているもので、頂部に１本の条線を刻む。

２～４は碑面の五輪塔２塔に梵字が刻まれており、梵字は単塔式五輪塔板碑と同様である。２は右側五輪塔地輪の梵字右に「妙」、同左に「善」、左側五輪塔地輪の梵字右に「道」、同左に「善」の文字が刻まれている。３の右側五輪塔地輪の梵字左側に文字が刻まれているが判読不明である。左側五輪塔地輪の梵字右側に「廣ヵ」、同左に「阿」の文字が刻まれている。４は基部に蓮華が線刻され、底面にホゾをもつ。

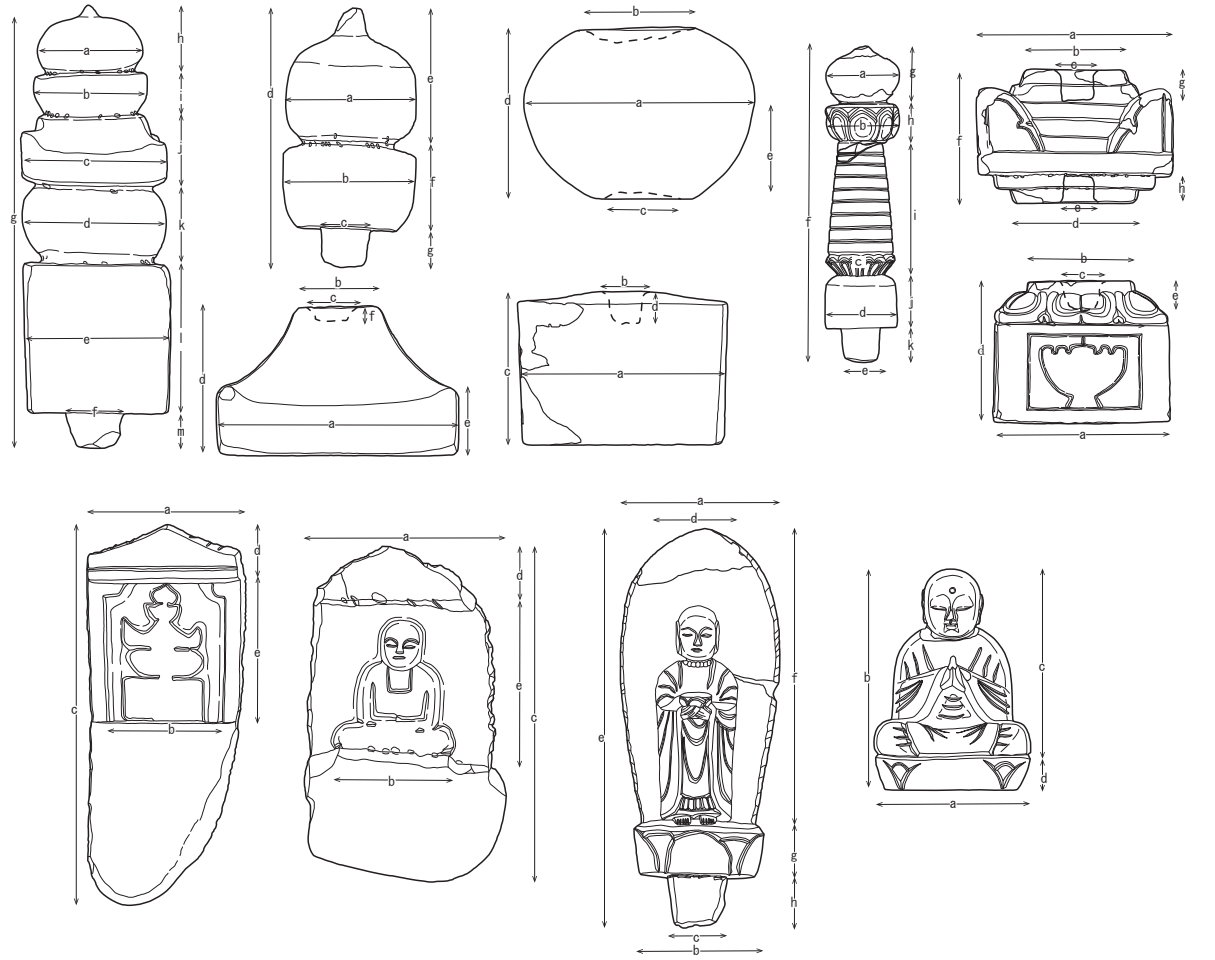
第22図５は石龕式板碑である。上部のホゾに屋根が、下部のホゾに基礎が付くとみられる。碑面には額を有し、２塔の五輪塔が線刻されている。両五輪塔の各部位には梵字が、右の五輪塔地輪には「道／高ヵ」、同左には「妙忍ヵ」、また額縁右に「永正十□年ヵ」、同左に「十二月廿七日」の文字が刻まれている。

第22図６は上記の板碑とは異なる形態の板碑で､厚さも薄い。底面付近の裏面はやや膨らませている。碑面縁に数㎝の額をめぐらし、額内に五輪塔が線刻されている。その五輪塔地輪には梵字の下に「天文廿四年／道順禅定門／八月十九日」の文字が刻まれている。

第23図１～３は如来座像板碑である。板碑の形態は五輪塔板碑と同じで、図像として阿弥陀如来座像を刻む。１は座像右に「真廿童女」、同左に「享禄二天八月廿八日」の文字が刻まれている。

Ⅳ　石仏

第23図４～10は石仏である。４は如来座像が浮き彫りされた石仏である。５は蓮華座に立つ地蔵菩薩が浮き彫りされている。頭部を欠が光背に丸く筋彫りされているようである。右手に錫杖を持つ。地蔵菩薩右に「□童女□□也」、同左に「(欠) □三年十月晦日」の文字が刻まれている。６～９は舟形石仏で蓮華座に立つ地蔵菩薩が浮き彫りされ、底部にホゾをもつ。６は地蔵菩薩に「□九ヵ年四月七日」、同左に「童ヵ女」の文字が刻まれている。８は地蔵菩薩右に「教国ヵ童子」、同左に「宝暦□二月十七日」の文字が刻まれている。９は地蔵菩薩の上に梵字「カ」、同右に「辛ヵ　幻夢童女」、同左に「己　宝暦十一　八月十六日」の文字が刻まれている。10は蓮華座に立つ地蔵菩薩像の丸彫りである。右手に錫



第 25 図　石造物計測部位模式図

杖を持ち、左手に宝珠を持つ。

Ⅵ　地蔵

第24図１～４は蓮華座に座っている地蔵菩薩像で丸彫りである。１・２は両手を合わせている。３・４は頭部付近を欠いている。

Ⅶ　その他

第24図５は石仏（第23図７）の台座である。幅26.2㎝、奥行き25.2㎝の方形を呈し厚さ10.3㎝を図る。中央やや奥にホゾ穴をもち、その手前に水鉢がある。石材は笏谷石である。

第24図６は石廟の土台である。幅83.2㎝、奥行き46.6㎝の長方形を呈し、厚さ9.1㎝を測る。縁の内側に溝を彫る際のアタリ線が一部残る。表面にはノミ痕とツル痕がみられる。中央に三を逆にしたような記号ある。石材は笏谷石である。

第１表　一石五輪塔観察表

挿図番号	遺構番号	グリッド	層位	法量（cm）													石材
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	
第17図１				10.4	10.1	14.0	14.4	14.8		43.9	9.1	4.3	6.5	10.0	14.0		安山岩
第17図２	14			8.7	9.0	12.6	12.4	12.8		44.5	7.4	4.6	6.1	5.3	21.8		安山岩
第17図３	14			8.6	9.5	12.9	13.0	13.2		34.5	4.2	3.3	6.0	5.4	15.6		安山岩
第17図４	14			8.5	9.3	12.5	12.2	12.9		35.0	4.5	3.4	6.1	4.8	16.2		安山岩
第17図５	２			8.4	9.0	11.6	10.4	11.8	4.6	32.4	5.3	2.5	5.6	6.0	12.0	2.8	安山岩
第17図６	11			8.3	8.6	13.0	12.8			(28.8)	6.6	4.6	8.1	9.0			安山岩
第17図７	11			12.7	12.1					(17.3)	9.7	6.8					笏谷石
第17図８	24	Ｃ３	表土			13.0	12.9			(14.5)			7.0	7.5			安山岩
第17図９	19				(9.4)	14.4	16.1	14.6		(45.5)		(4.4)	8.6	12.2	20.3		安山岩
第17図10		Ａ３	表土			(11.6)	11.9	11.9		(39.0)			7.6	7.1	23.9		笏谷石
第17図11		Ｂ２	表土					13.2		(25.7)	—				25.0		安山岩
第17図12	12							13.0		(24.2)					24.2		笏谷石
第17図13		Ａ２	表土					17.1		36.3					35.3		笏谷石
第17図14	６　６　12							(17.3)		(22.4)					22.4		笏谷石

第２表　五輪塔空風輪観察表

挿図番号	遺構番号	グリッド	層位	法量（cm）							石材
				a	b	c	d	e	f	g	
第17図15	16		表土	15.1	16.0	4.5	23.8	12.2	9.0	2.3	安山岩
第17図16	4			12.2	12.9	4.5	21.3	10.2	8.6	2.9	安山岩
第17図17			表土	9.6	9.8	3.7	19.2	10.2	6.4	2.8	安山岩
第17図18	13			9.6	12.0	4.0	16.8	7.4	6.8	2.4	安山岩
第17図19		Ｘ０	表土	15.4	16.4	7.0	23.4	11.2	11.1	5.2	安山岩
第17図20	14		表土	13.2	14.2	4.8	20.2	11.6	11.0	1.4	花崗岩
第17図21				10.45	10.8	3.7	15.4	9.9	7.8	0.7	安山岩

第３表　五輪塔火輪観察表

挿図番号	遺構番号	グリッド	層位	法量（cm）					石材
				a	b	c	d	e	
第18図１		Ｙ０	１層目遺構面上	39.0	16.5	7.5	26.2	9.7	花崗岩
第18図２				24.6	9.5	3.7	13.2	5.7	花崗岩
第18図３		Ｘ０	表土	25.7	8.3	5.0	15.9	5.5	花崗岩
第18図４		Ｘ０	表土	24.2	7.5	5.0	15.6	7.0	花崗岩
第18図５			表土	24.5	9.2	4.1	12.3	4.5	安山岩
第18図６		Ｄ１		18.9	7.8	4.0	11.7	5.1	安山岩
第18図７	24	Ａ３	表土	19.6	8.0	3.5	10.1	5.0	安山岩
第18図８	3			22.0	9.5	4.1	15.2	5.9	安山岩

挿図番号	遺構番号	グリッド	層位	法量（cm）					石材
				a	b	c	d	e	
第18図９	17			23.9	7.4	4.7	15.4	5.2	安山岩
第18図10	3			22.9	9.6	3.9	13.5	7.4	安山岩
第18図11		Ｂ２	表土	23.8	9.4	4.7	13.3	5.8	安山岩
第18図12		Ｂ２	表土	23.8	11.6	3.8	13.0	6.0	安山岩
第18図13				20.4	8.4	4.2	12.1	7.0	安山岩
第18図14			盛土	20.2	8.3	3.4	10.4	5.1	安山岩

第４表　五輪塔水輪観察表

挿図番号	遺構番号	グリッド	層位	法量（cm）					石材
				a	b	c	d	e	
第18図15	15			27.8	12.0	14.2	19.0	11.0	安山岩
第18図16		Ｘ０		24.4	10.3	12.4	18.2	11.0	安山岩
第18図17	不明		表土	24.3	11.3	11.6	17.0	9.2	安山岩
第18図18	９			22.4	9.0	10.8	16.6	9.9	安山岩
第18図19	13・14間	Ｃ３	地山中	21.5	9.8	11.5	15.1	8.5	安山岩
第18図20	SP12	Ｘ０	遺構埋土	21.6	8.8	11.2	14.4	8.8	安山岩
第18図21		Ｂ３	表土	21.6	10.2	11.3	15.3	9.0	安山岩
第19図１		Ｘ０	表土	23.5	11.5	13.5	16.9	9.4	花崗岩
第19図２		Ｘ０	表土	38.3	15.6	17.9	30.0	18.0	花崗岩

第５表　五輪塔地輪観察表

挿図番号	遺構番号	グリッド	層位	法量（cm）				石材
				a	b	c	d	
第19図３	8	Ｘ１	表土	27.5	ホゾ穴無	19.0		花崗岩
第19図４			表土	21.6	5.2	16.4		安山岩
第19図５				23.7	ホゾ穴無	15.0		安山岩
第19図６		Ｂ２	表土	21.7	6.2	17.5		安山岩
第19図７		Ｅ３	表土	(24.1)	6.0×5.5	18.0		安山岩
第19図８			表土	23.0	ホゾ穴無	17.6		安山岩
第19図９	集石			19.5	ホゾ穴無	15.0		安山岩
第19図10	14			20.8	5.4	15.8		安山岩
第19図11	21	Ｂ４	表土	19.8	ホゾ穴無	12.5		安山岩
第19図12				22.0	ホゾ穴無	13.0		安山岩
第19図13	石垣	Ｂ２		22.3	ホゾ穴無	16.2		安山岩
第19図14	集石			19.3	ホゾ穴無	19.1		安山岩

第６表　宝篋印塔観察表

挿図番号	遺構番号	グリッド	層位	部位	法量（cm）											石材
					a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	
第19図15	11			相輪部	9.3	9.3					6.3	4.5				安山岩
第19図16		Ｘ０		相輪部			9.6	10.0	5.5				(15.6)	7.3	4.8	安山岩
第19図17		Ｂ２	表土	笠部	27.3	15.9	5.1	18.1	4.0	19.0	4.1	3.7				安山岩
第19図18			表土	笠部	26.2	10.5	5.6	16.6	5.5	20.1	5.3	3.9				安山岩
第19図19			表土	基礎	25.0	15.0	6.0	20.2	4.1							安山岩
第19図20			表土	基礎	28.8	18.4	6.4	22.2	4.8							安山岩

第７表　板碑観察表

挿図番号	遺構番号	グリッド	層位	法量（cm）									石材
				a	b	c	d	e	f	g	f	i	
第20図１		Ｂ２	表土	21.0		50.4	7.8	18.2					安山岩
第20図２	14			24.2		54.4	7.8	19.6					安山岩
第20図３	13			20.7		61.0	6.2	26.6					安山岩
第20図４	17	Ｂ２		21.5		44.6	7.0	18.4					安山岩

挿図番号	遺構番号	グリッド	層位	法量（cm）									石材
				a	b	c	d	e	f	g	f	i	
第20図５	18	Ａ３	表土	15.8		47.2	5.8	17.0					安山岩
第20図６	17			17.4		33.1	5.1	15.0					安山岩
第20図７	11			16.1		30.0	6.0	12.35					安山岩
第20図８	18			17.9		15.0	15.8	15.6					安山岩
第20図９	11			17.8		39.8	6.1	18.2					安山岩
第20図10	3			11.3		35.2	6.2	15.2					安山岩
第21図１	16	Ｘ１		23.3		44.3	7.5	18.9					安山岩
第21図２	6			18.9		43.3	6.6	14.6					安山岩
第21図３	10			20.7		36.4	9.2	18.6					安山岩
第21図４	12			18.9		33.9	6.3	12.7					安山岩
第21図５		Ｘ１	表土	17.15		38.6	6.5	13.1					安山岩
第21図６		Ｘ０	表土	22.9		47.6	9.3	20.7					安山岩
第21図７	17			15.4		38.9	6.8	15.7					安山岩
第21図８	18			18.6		10.1	14.1	13.4					安山岩
第21図９	4			15.3		(24.0)	(8.7)	(15.3)					安山岩
第22図１	16			22.0		21.8	7.6	14.8					安山岩
第22図２	6			(18.65)		(36.65)	(9.5)	18.25					安山岩
第22図３	11			25.0		46.2	7.0	17.4					安山岩
第22図４	24	Ｂ３		20.0		44.7	9.1	24.2					安山岩
第22図５	14			22.4	17.4	32.6		22.5	4.3	2.2	4.4	2.3	安山岩
第22図６	20			20.1	9.50	(17.2)		(9.45)					笏谷石

第８表　石仏観察表

挿図番号	遺構番号	グリッド	層位	法量（cm）					石材
				a	b	c	d	e	
第23図１	16			21.6	13.2	33.4	10.8	13.3	安山岩
第23図２	1	Ｘ０		26.65	15.8	44.8	7.65	19.5	安山岩
第23図３	15			23.5	12.3	47.2	13.0	16.4	安山岩
第23図４	12			19.6	14.0	36.7	9.45	21.0	安山岩
第23図５	14			25.2	17.2	(39.0)	2.8	(34.0)	笏谷石

第９表　仏像観察表

挿図番号	遺構番号	グリッド	層位	法量							石材
				a	b	c	d	e	f	g	
第23図６	13			8.30	14.95	7.00	9.2	(23.40)	－	4.90	笏谷石
第23図７		Ａ３	表土	22.0	17.0	8.6	9.8	57.6	44.6	6.3	笏谷石
第23図８	19			11.1	17.2	9.9	10.8	52.8	10.2	5.5	笏谷石
第23図９	14			23.4	17.5	9.8	9.7	49.0	9.0	5.9	笏谷石
第23図10	14			17.4	17.40	9.6		(47.5)	(34.2)	5.8	笏谷石

第10表　地蔵観察表

挿図番号	遺構番号	グリッド	層位	法量				石材
				a	b	c	d	
第24図１	8			19.2	28.4	24.4	4.0	笏谷石
第24図２	16-2			23.7	(22.0)	(15.7)	6.3	笏谷石
第24図３	12			16.65	23.35	19.7	3.65	笏谷石
第24図４	17			19.15	(17.8)	(13.2)	4.6	笏谷石

第５章　まとめ

大蔵北遺跡で出土した石造物について、検討をしたい

石材は、本遺跡において五輪塔・板碑とも花崗岩製はみられるものの主は安山岩である。同じ敦賀市内の本遺跡から南へ約2.5㎞離れた坂ノ下中世墓群であるが五輪塔は花崗岩製、板碑は安山岩製が主である。次に美浜町の芳春寺山中世墓は五輪塔・板碑とも花崗岩製である。少しはなれるがおおい町の山田中世墓群では五輪塔・板碑とも近隣の高浜町日引で産出される安山岩質凝灰岩の「日引石」が主である。同じ敦賀市内でも、石造物の石材に違いがあるように若狭地方の中世墓の石造物の石材は、越前地方で笏谷石が主に利用されたといった、特定の石材が利用されていないようである。

次に板碑であるが、形態には五輪塔型・如来座像型・石龕式型などがみられる。本遺跡では五輪塔型の板碑が多数を占めている。坂ノ下中世墓群でも五輪塔型が半数以上を占めているが、芳春寺山中世墓群や山田中世墓群では如来座像型が多数を占めている。他に比べ五輪塔型の割合が高いのは、京都など上方の影響を受けていると考えられる。

最後に紀年銘についてであるが、紀年銘が刻まれた石像物が比較的多く出土している。その内訳は組み合わせ式五輪塔の地輪、一石五輪塔、五輪塔が刻まれ板碑の順になる。

一番古い紀年銘は五輪塔地輪に刻まれたものは、文明４年(1472)であり、この頃には中世墓が造営されて、最後が宝篋印塔の基礎に刻まれた元亀元年(1570)の紀年銘で中世墓が終焉をむかえたものと推測する。

中世墓は、文明４年(1472)から元亀元年(1570)の約100年にわたり、当地で営まれていたことになる。1475年に朝倉氏が越前を平定し、敦賀を朝倉氏の親族が支配するようになった。そして、1570年に織田氏の越前攻めによる戦が敦賀付近であり、朝倉軍が敗北している。このように、朝倉氏が敦賀を支配していた時期と中世墓が造営していた時期と重なることから、石造物の造立に朝倉氏の影響が及んでいたと推量する。

第 11 表　紀年銘のある石造物の年代

紀年銘	年代	種別	石材
文明４年	1472	五輪塔 地輪	安山岩
文明10年代	1478～1487	五輪塔 地輪	安山岩
延徳２年	1490	一石五輪塔	安山岩
明応７年	1498	五輪塔 地輪	安山岩
永正５年	1508	宝篋印塔 基礎	安山岩
永正８年	1511	五輪塔所刻板碑	安山岩
永正10年代	1513～1521	五輪塔所刻板碑	安山岩
永正12年	1515	五輪塔 地輪	安山岩
永正13年	1516	五輪塔 地輪	安山岩
永正17年	1520	五輪塔 地輪	安山岩
大永５年	1525	五輪塔 地輪	安山岩
大永６年	1526	一石五輪塔	安山岩
大永６年	1526	五輪塔所刻板碑	安山岩
享禄２年	1529	如来陽刻板碑	安山岩
享禄３年	1530	一石五輪塔	安山岩
享禄５年	1532	五輪塔 地輪	安山岩
天文４年	1535	五輪塔 地輪	安山岩
天文７年	1538	五輪塔 地輪	安山岩
天文20年	1541	五輪塔 地輪	安山岩
天文24年	1545	五輪塔所刻板碑	笏谷石
元亀元年	1570	一石五輪塔	安山岩
元亀元年	1570	宝篋印塔 基礎	安山岩
元和９年	1623	一石五輪塔	笏谷石
寛永８年	1631	一石五輪塔	笏谷石
寛永10年	1633	一石五輪塔	笏谷石

参考文献

敦賀市史編さん委員会　1981 「敦賀市の小板碑」 敦賀市史研究２号

敦賀市史編さん委員会　1985 『敦賀市史　通史編　上巻』

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2003 『滝見古墳群　大飯神社古墳群　山田古墳群　山田中世墓群』

福井県埋蔵文化財調査報告　第75集

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2006 『芳春寺山中世墓群』 福井県埋蔵文化財調査報告　第92集

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2008 『坂ノ下遺跡群』 一般国道８号バイパス関係遺跡発掘調査報告書第１集